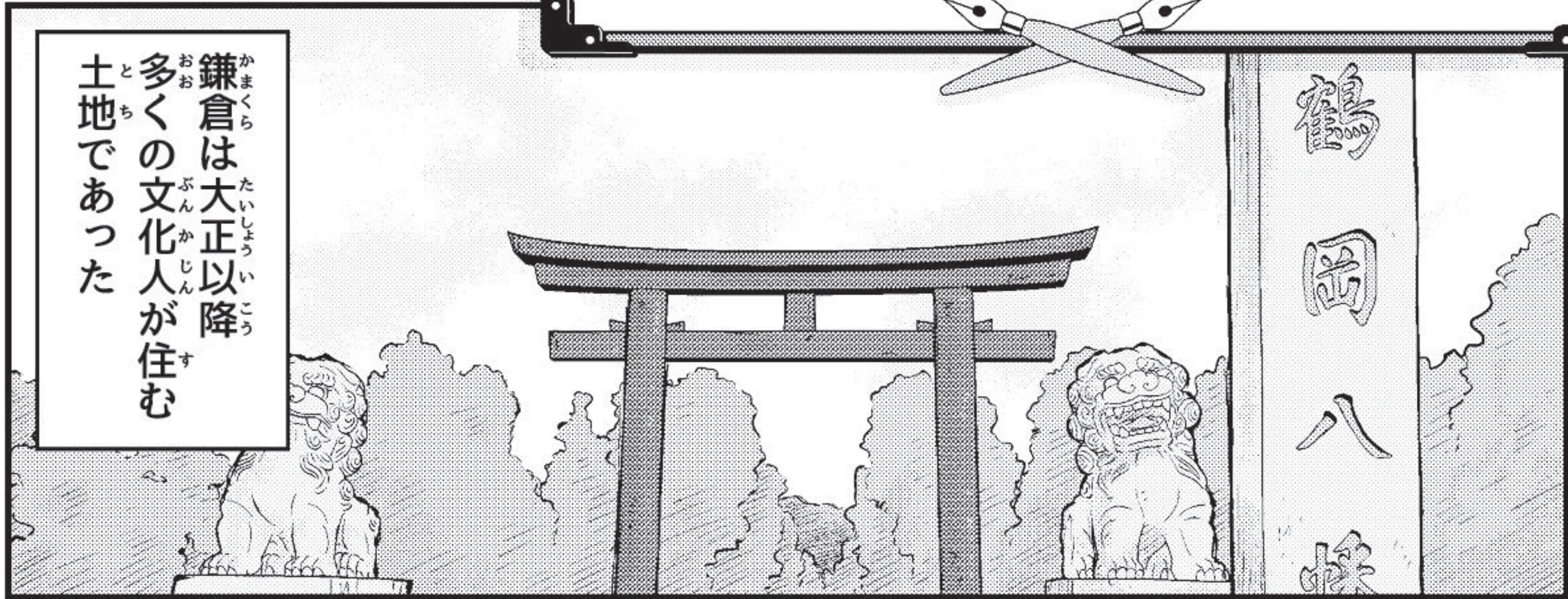


だい しょう せい じ か じ だい
【第5章 政治マンガ家時代】



鎌倉は大正以降
 多くの文化人が住む
 土地であった



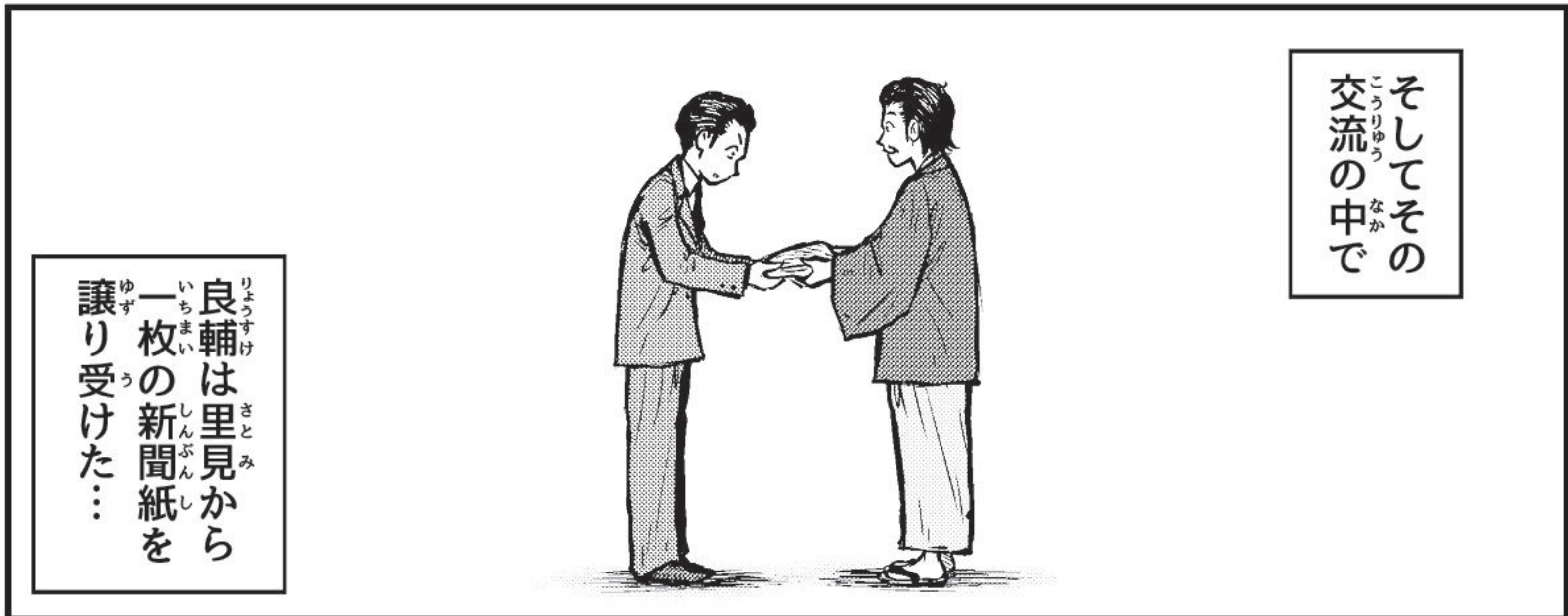
良輔も鎌倉で
 小林秀雄
 大佛次郎
 里見弴などの
 文化人との交流を
 深めていた

小説家
 里見弴

小説家
 大佛次郎

文芸評論家
 小林秀雄

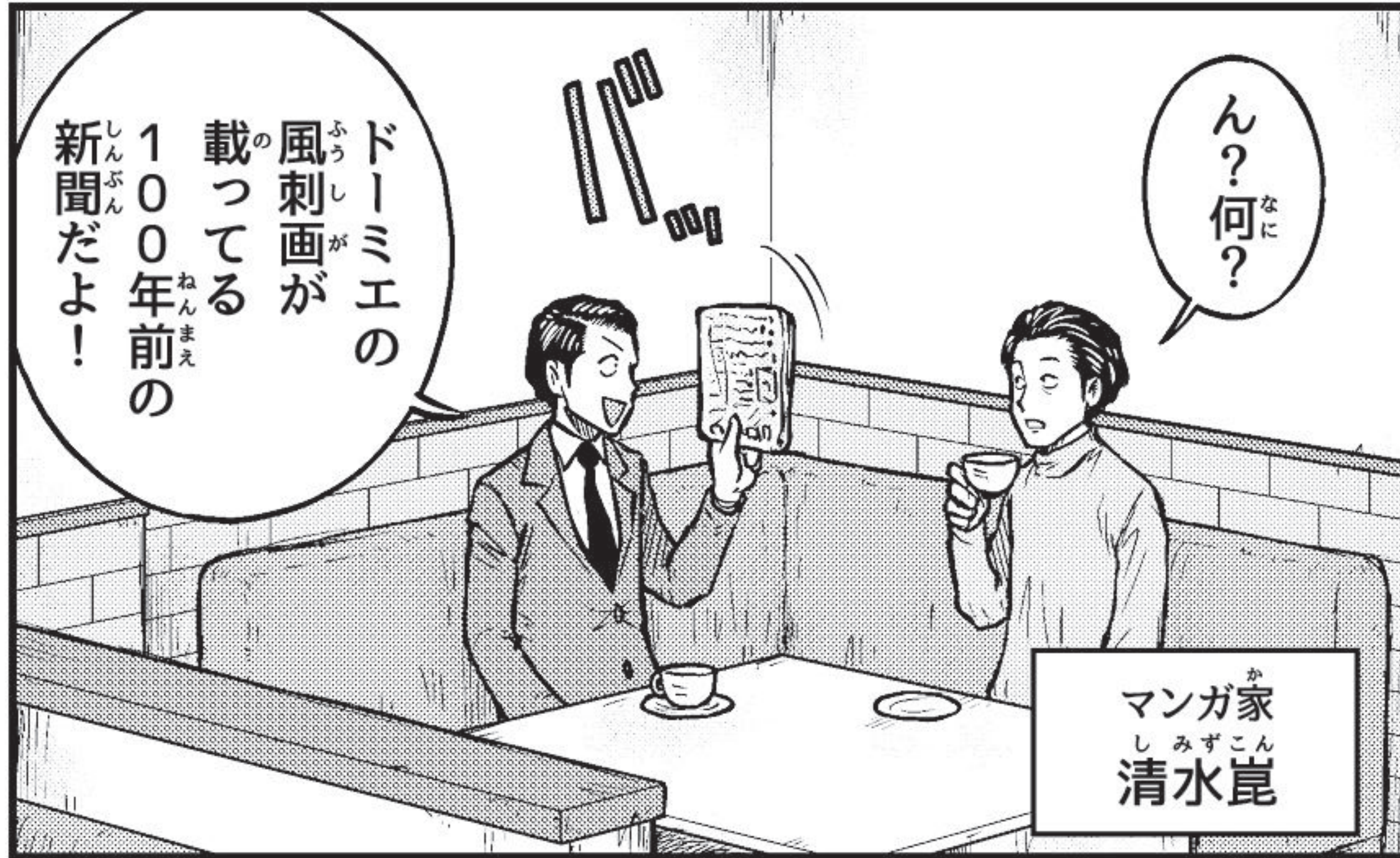
那須良輔 (37才)



そしてその
 交流の中で

良輔は里見から
 一枚の新聞紙を
 譲り受けた：

※ドミーエ…19世紀のフランスの風刺画家。





※一平先生(岡本一平)...日本の政治マンガの第一人者。 芸術家・岡本太郎の父。





よこやまりゅういち
横山隆一の推薦で
まいにちしんぶんせんぞく
毎日新聞専属の
せいじ
政治マンガ家と
なつたのだ

しょうわ
昭和24年
しみず
清水が言った通り
りょうすけ
良輔に出番が
まわ
回ってくる

マンガ家
よこやまりゅういち
横山隆一

昭和24年(1949年)



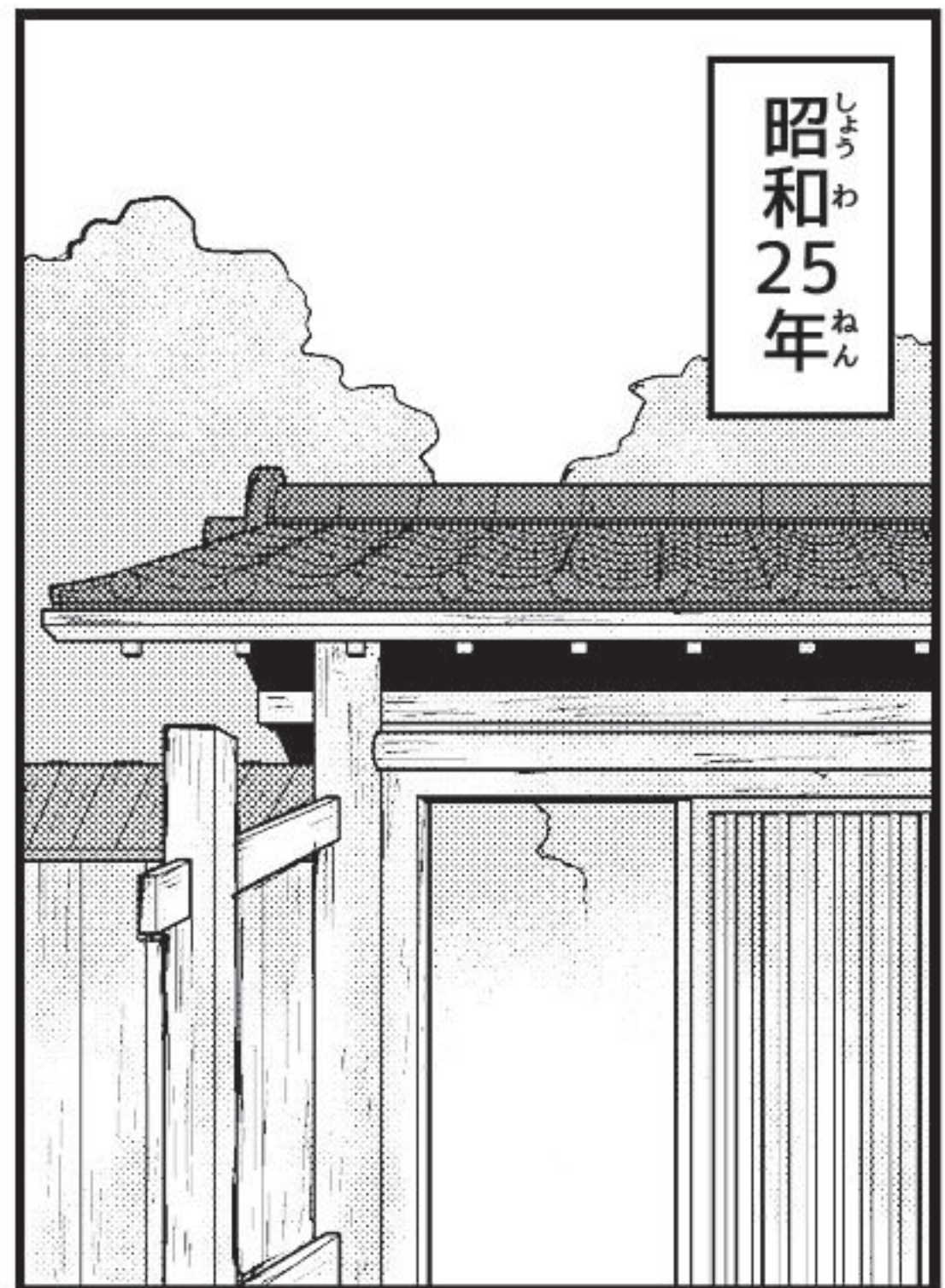
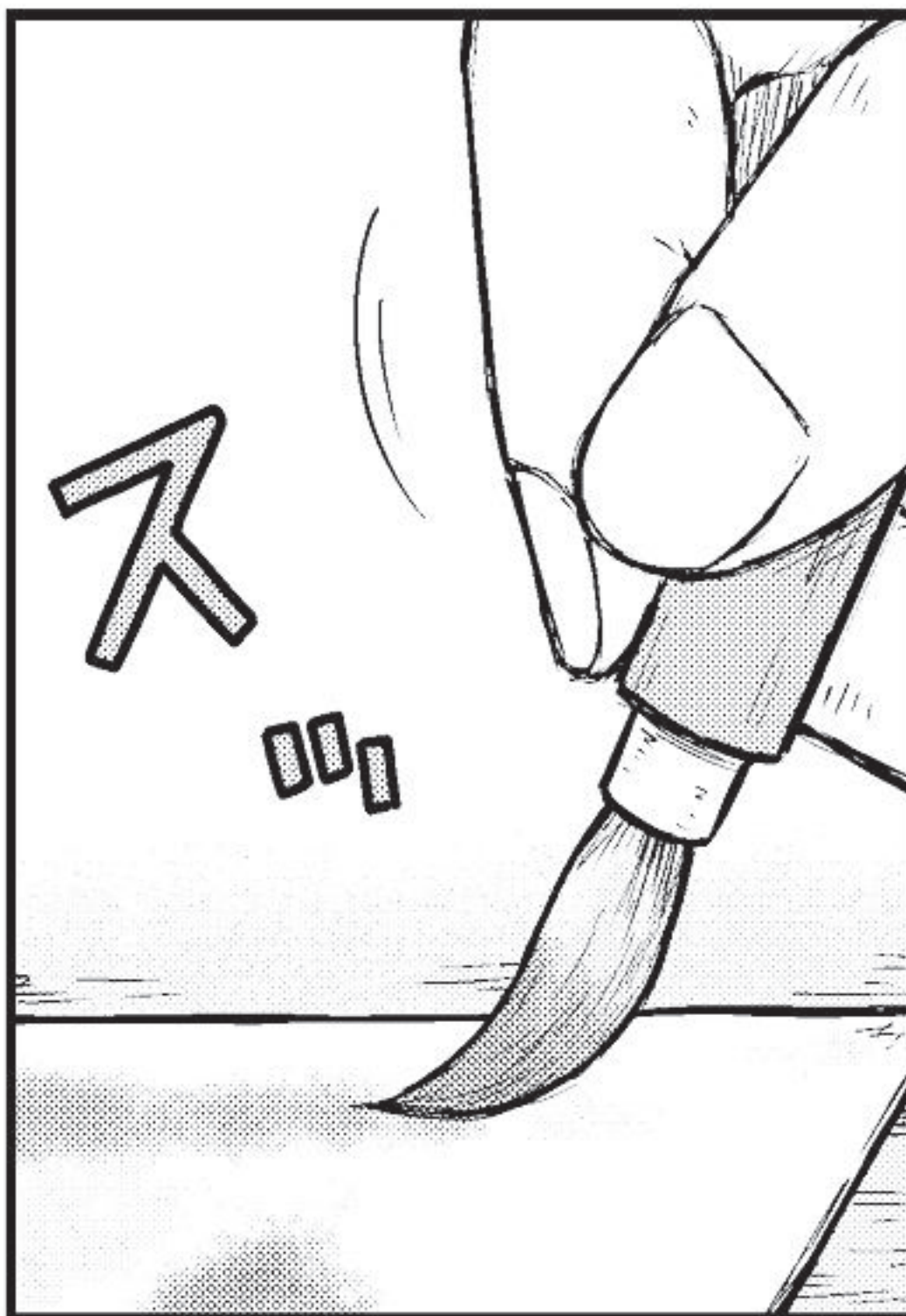
のち
後に
せいじ
「政治マンガの三羽鳥」
とよ
と呼ばれる
あさひ
朝日の清水崑
よみうり
読売の近藤日出造
まいにち
毎日の那須良輔が

この年に
そろつたのである

よみうりしんぶんせんぞく
読売新聞専属
こんどう ひ で ぞう
近藤日出造

あさひ しんぶんせんぞく
朝日新聞専属
し みずこん
清水崑

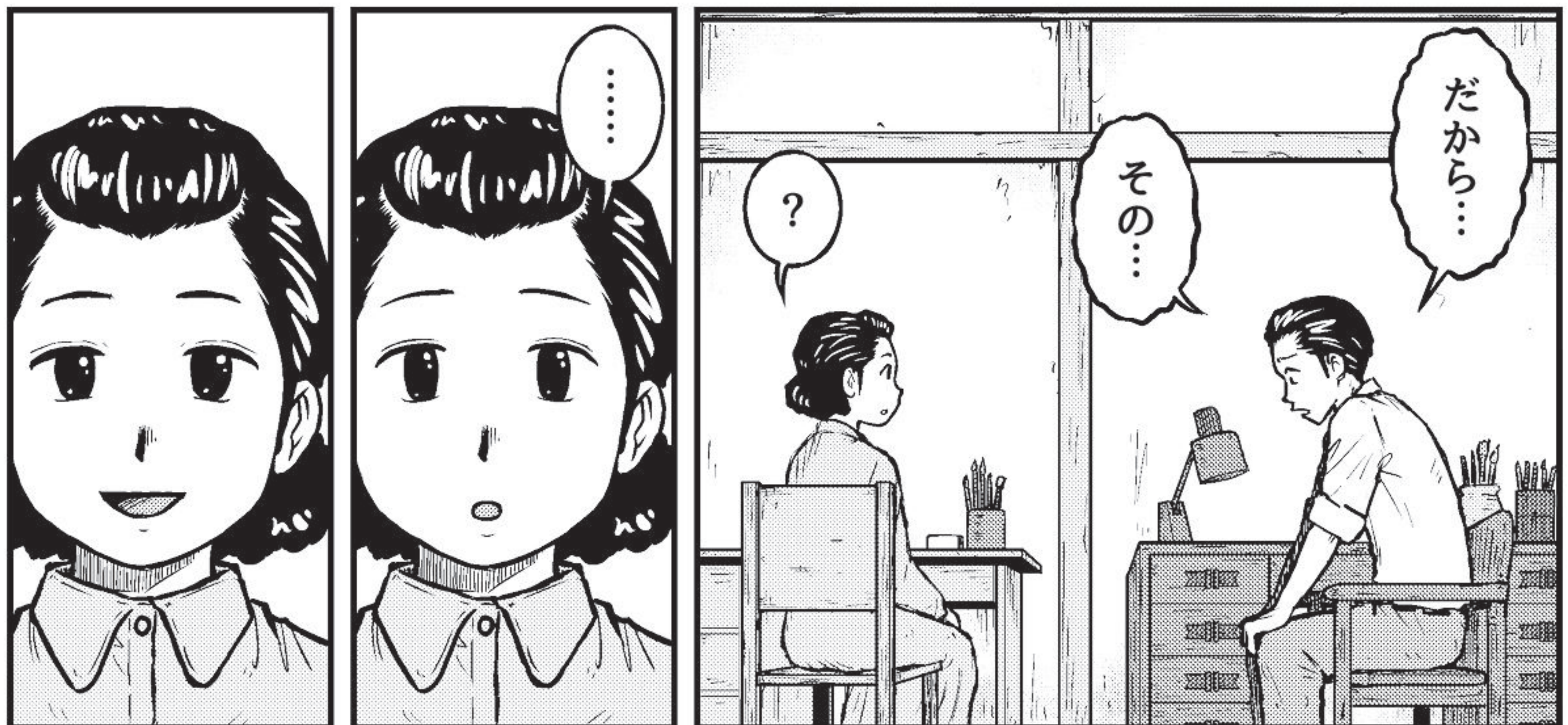
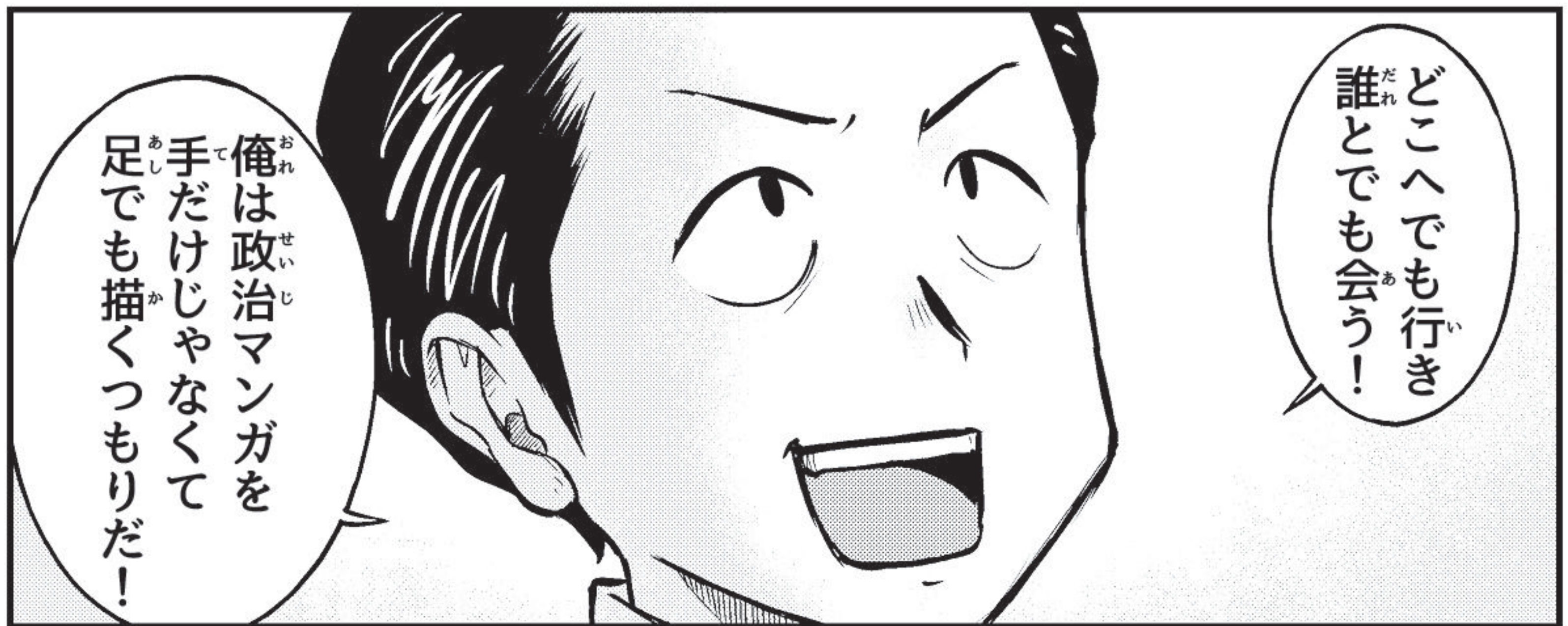
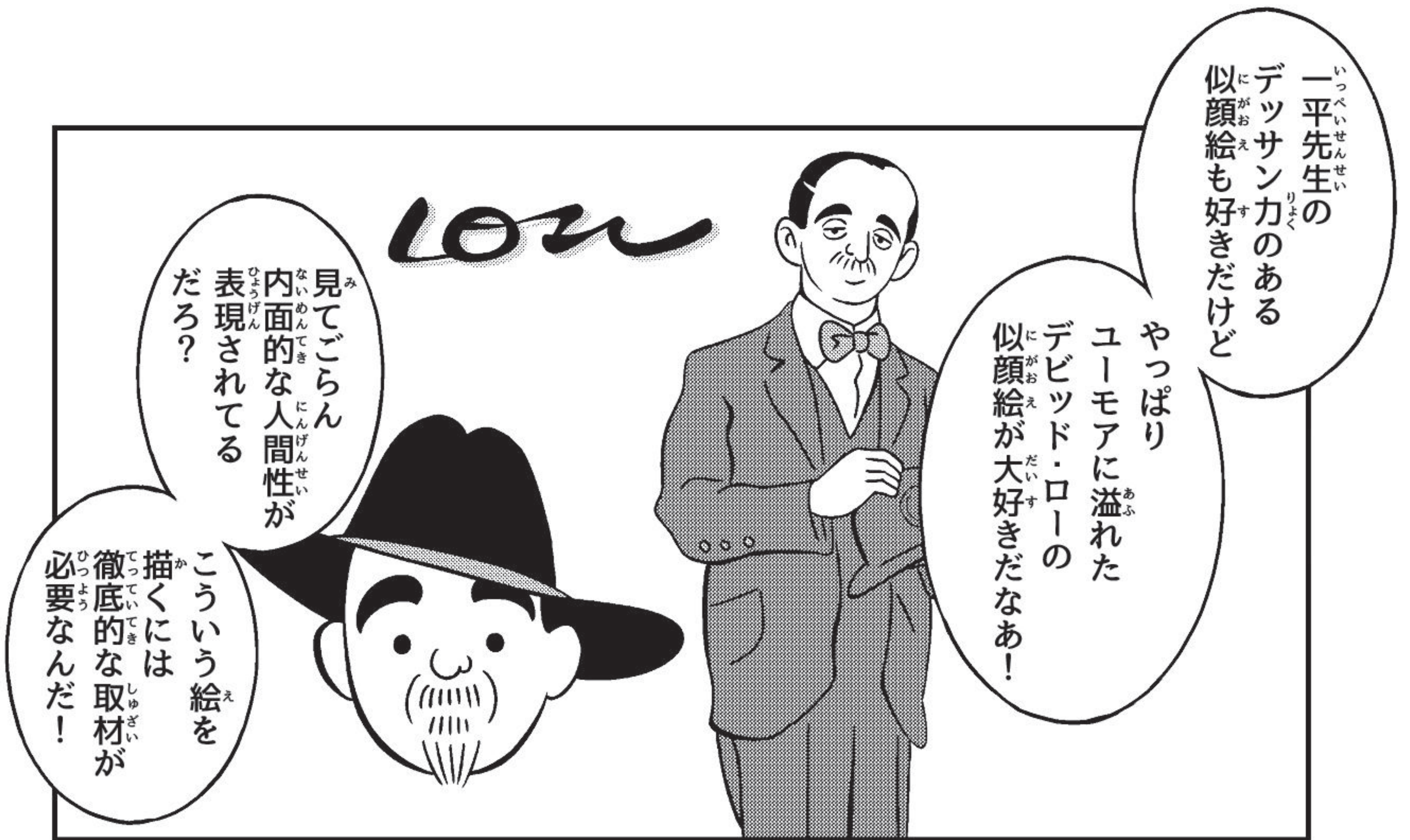
まいにちしんぶんせんぞく
毎日新聞専属
な すりょうすけ
那須良輔

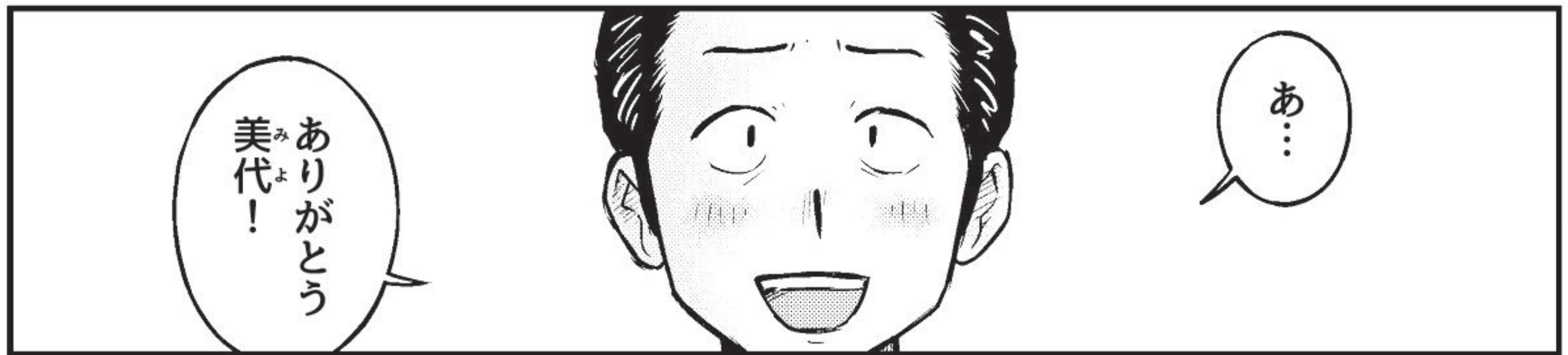
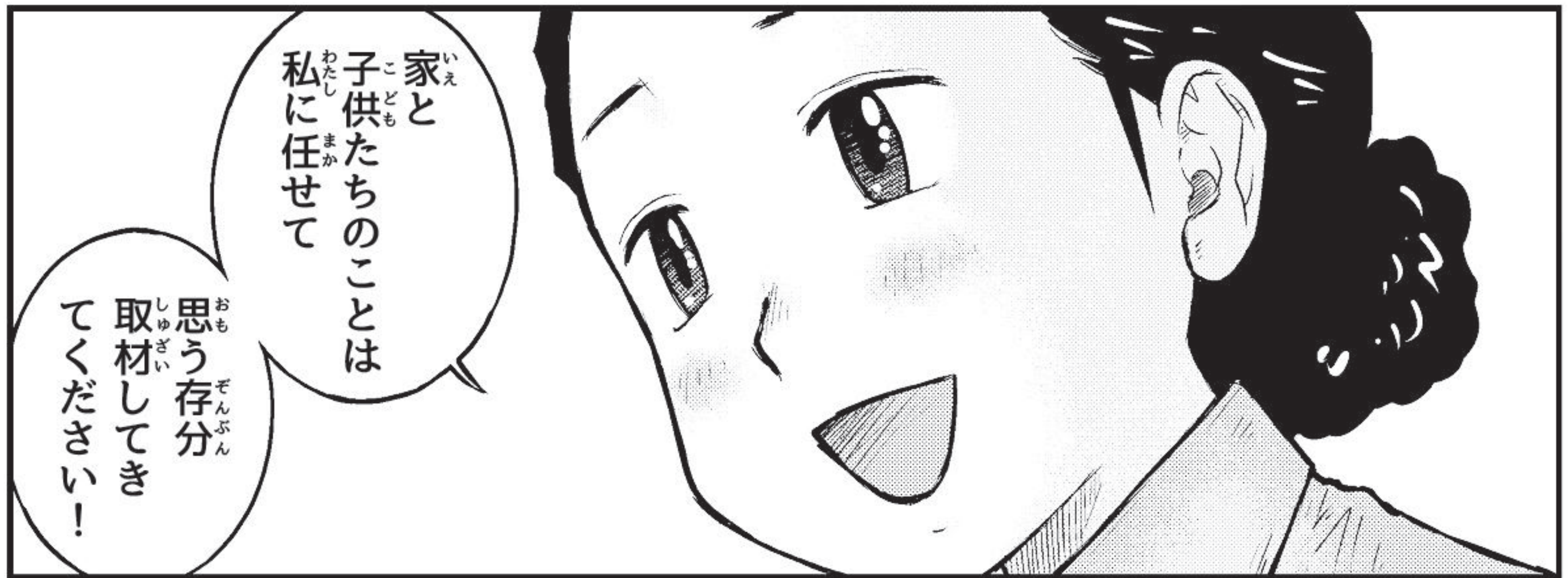


昭和25年(1950年)



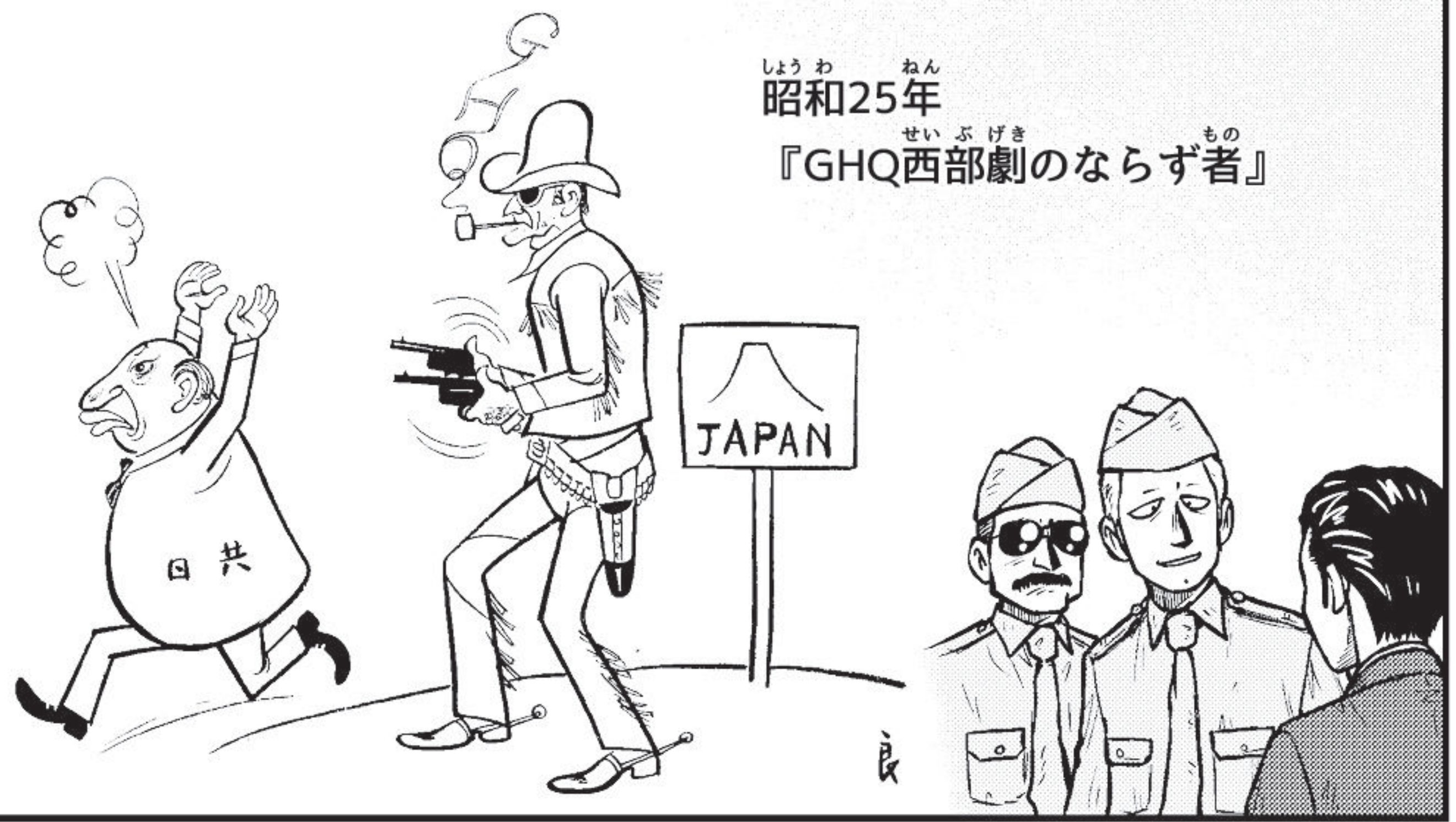
※デビッド・ロー…イギリスの政治マンガ家。





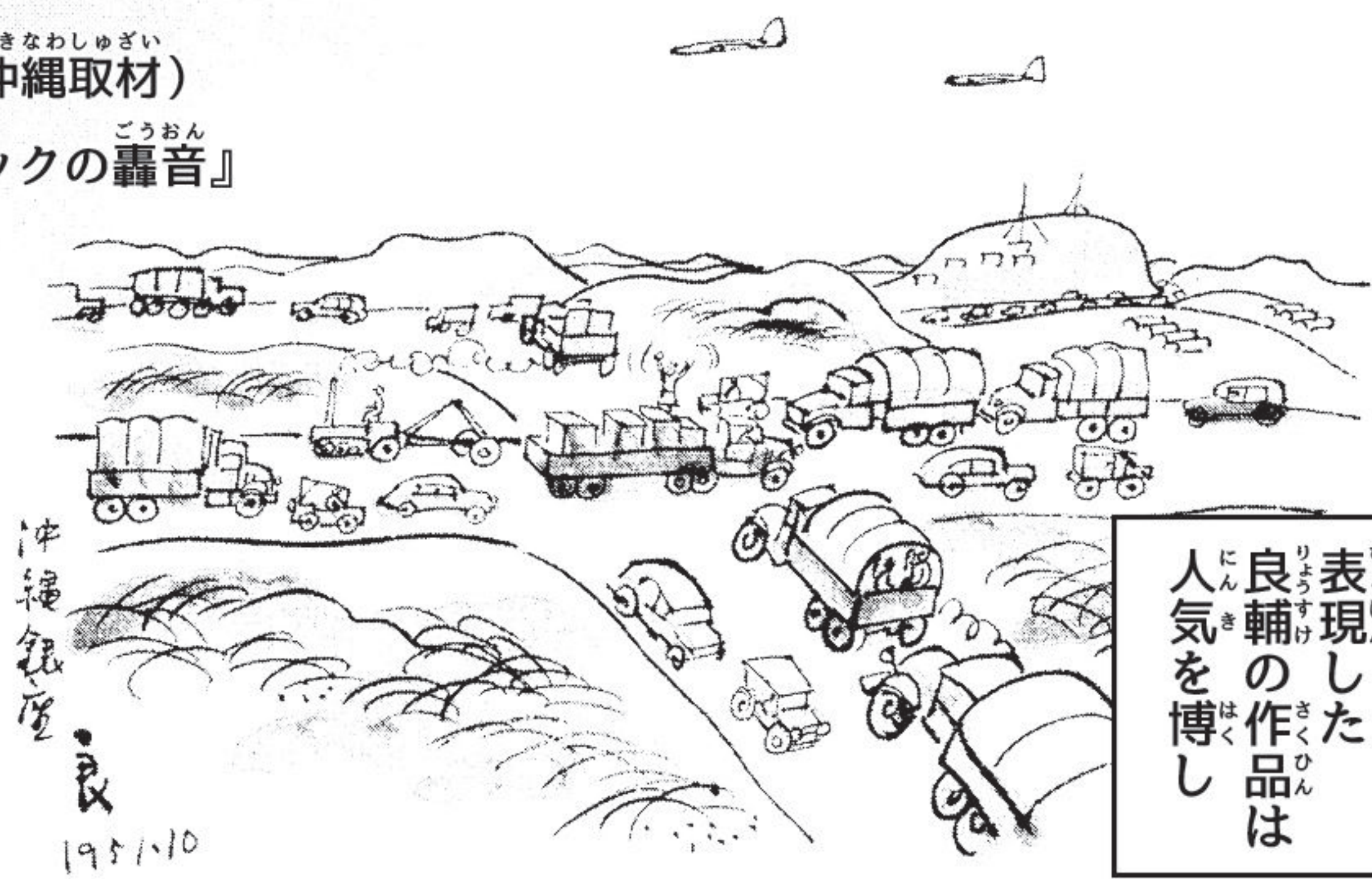
徹底的な取材を通して
風刺・ユーモア・
人間性だけではなく

昭和25年
『GHQ西部劇のならず者』



昭和25年(1950年)

昭和26年(沖縄取材)
『米軍トラックの轟音』

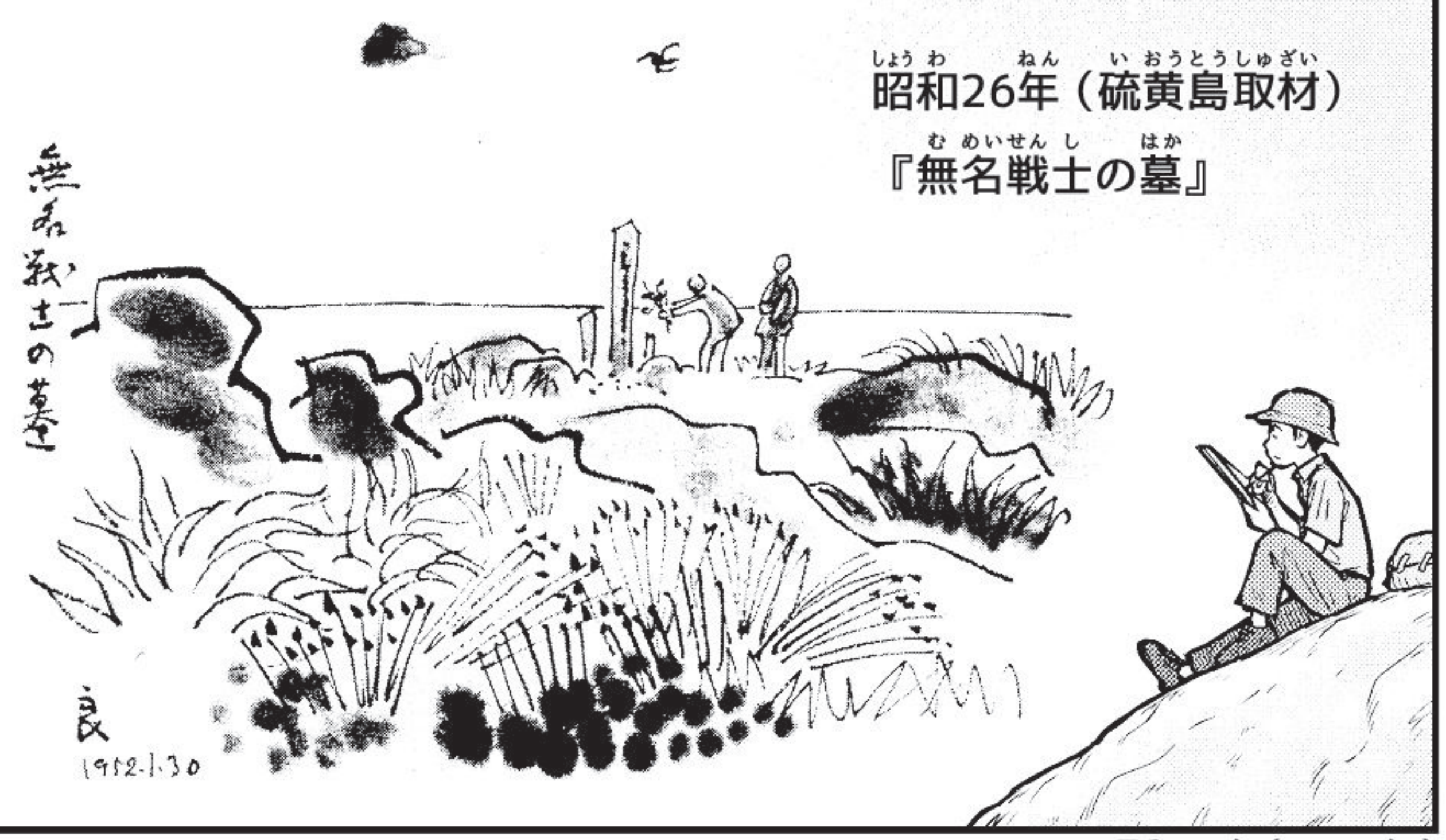


その時代の
空気感までも
表現した
良輔の作品は
人気を博し

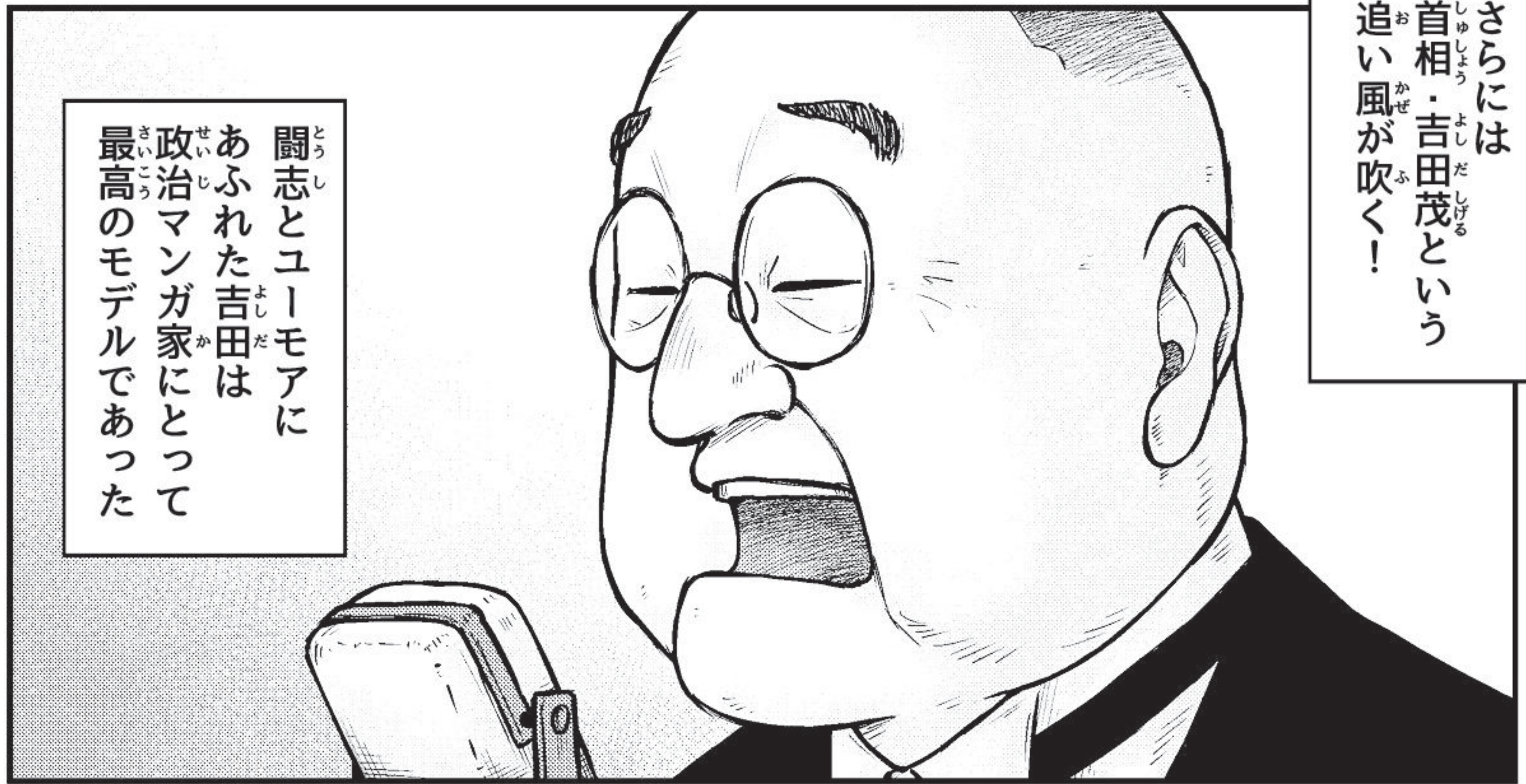
昭和26年(1951年)

昭和26年(硫黄島取材)
『無名戦士の墓』

良輔の
時代を切り取るセンスは
政治マンガに新しい風を
巻き起こした

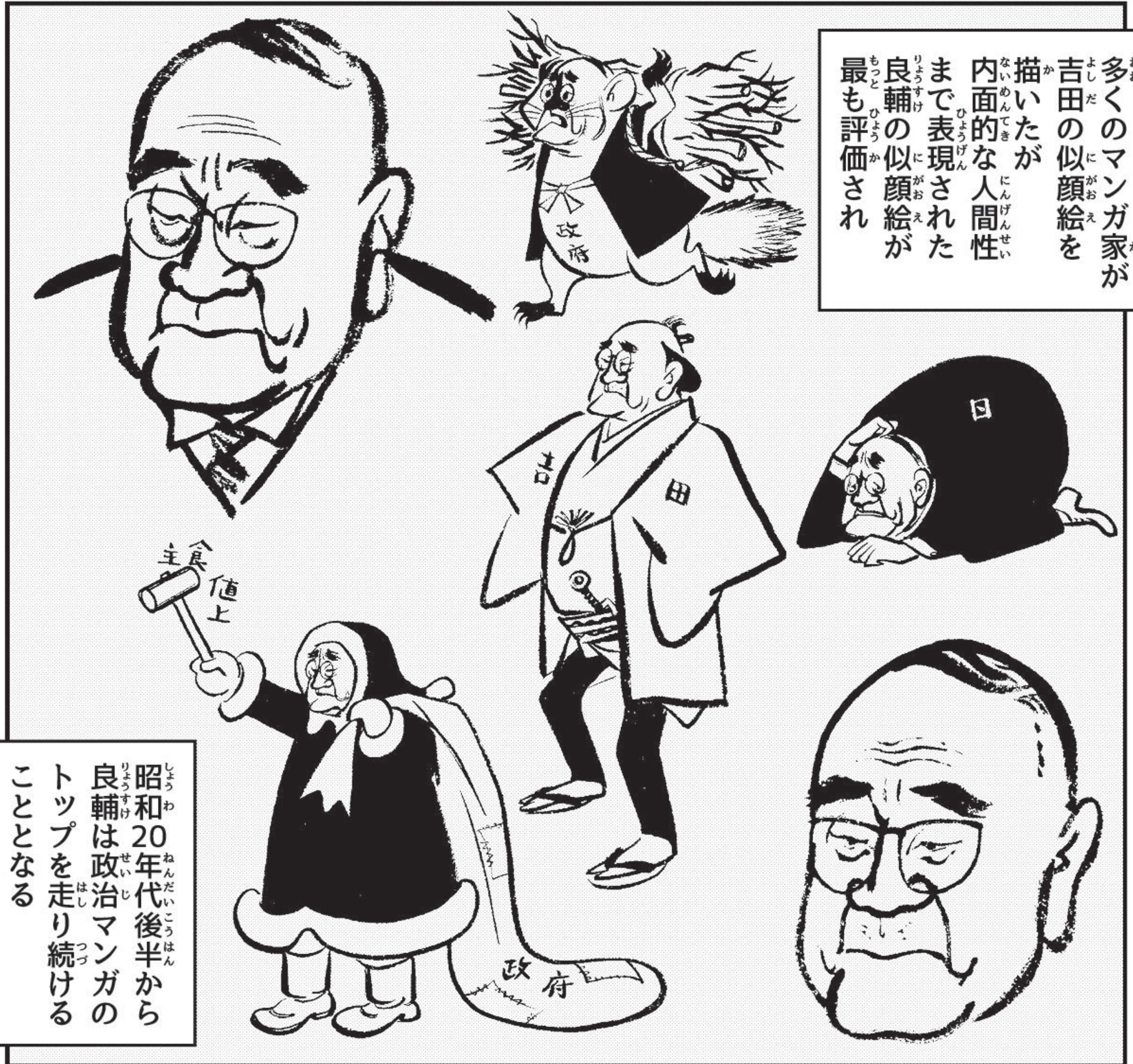


昭和26年(1951年)



さらには
首相・吉田茂という
追い風が吹く!

闘志とユーモアに
あふれた吉田は
政治マンガ家にとって
最高のモデルであった



多くのマンガ家が
吉田の似顔絵を
描いたが
内面的な人間性
まで表現された
良輔の似顔絵が
最も評価され

昭和20年代後半から
良輔は政治マンガの
トップを走り続ける
こととなる

昭和20年(1945年)



昭和38年
吉田茂政界引退…

昭和38年(1963年)



昭和40年以降
ストーリー漫画の
台頭により
政治マンガに少し
元気がなくなると



随筆や風景画などの
作品作りにも
取り組み始めた

昭和40年(1965年)



晩年は
熊本と鎌倉の
二つの土地を
足場とし

数多くの風景画が
意欲的に制作

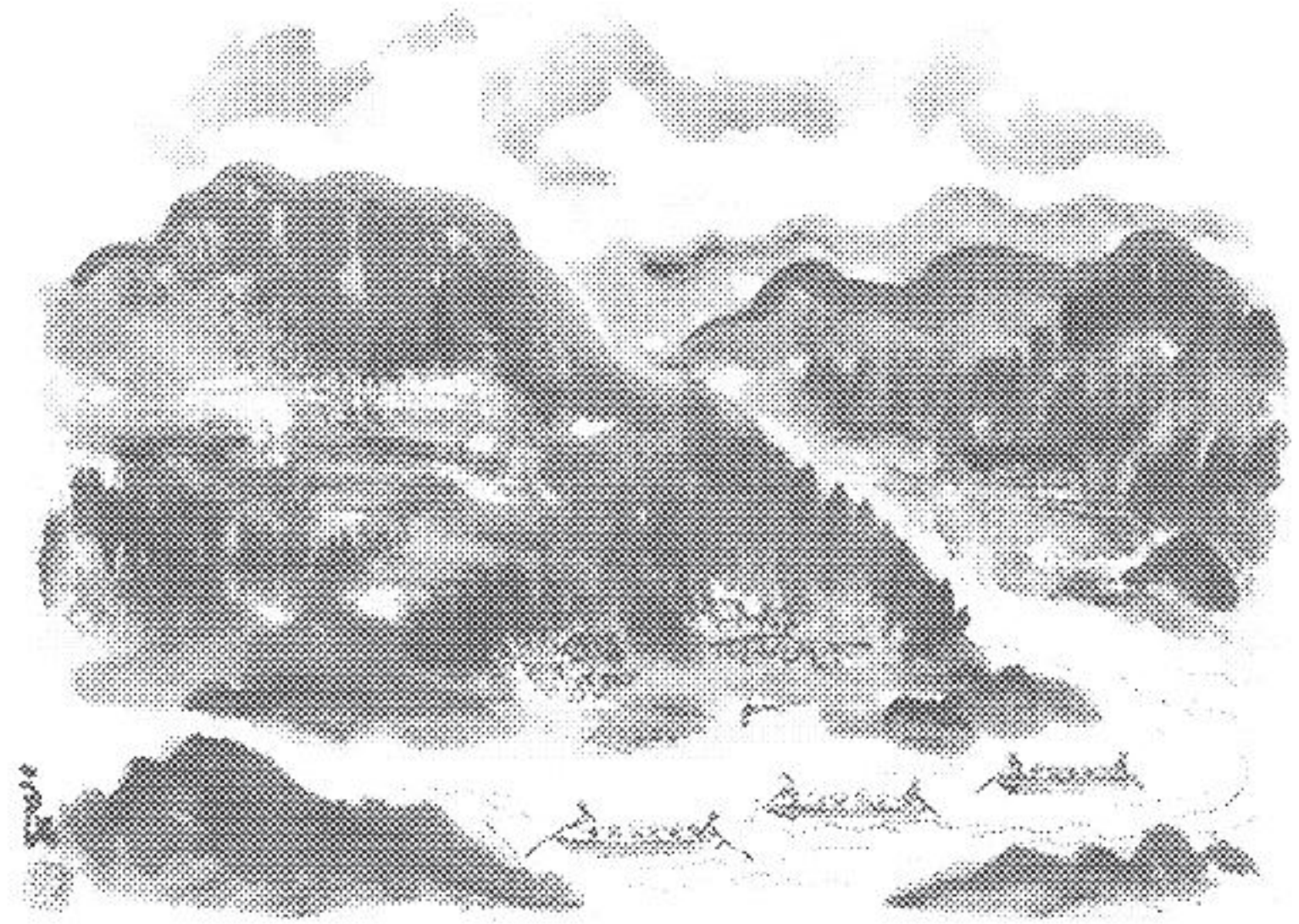
里宮神社(湯前町)

那須良輔(65才)

政治マンガ
 だけではなく
 風景画でも
 良輔の名は
 広く知れ渡った



みやこがわ よづ
 『都川の夜釣り』



しょうわ ねん がつ すかわ
 昭和61年5月『ガワツパの住む川』



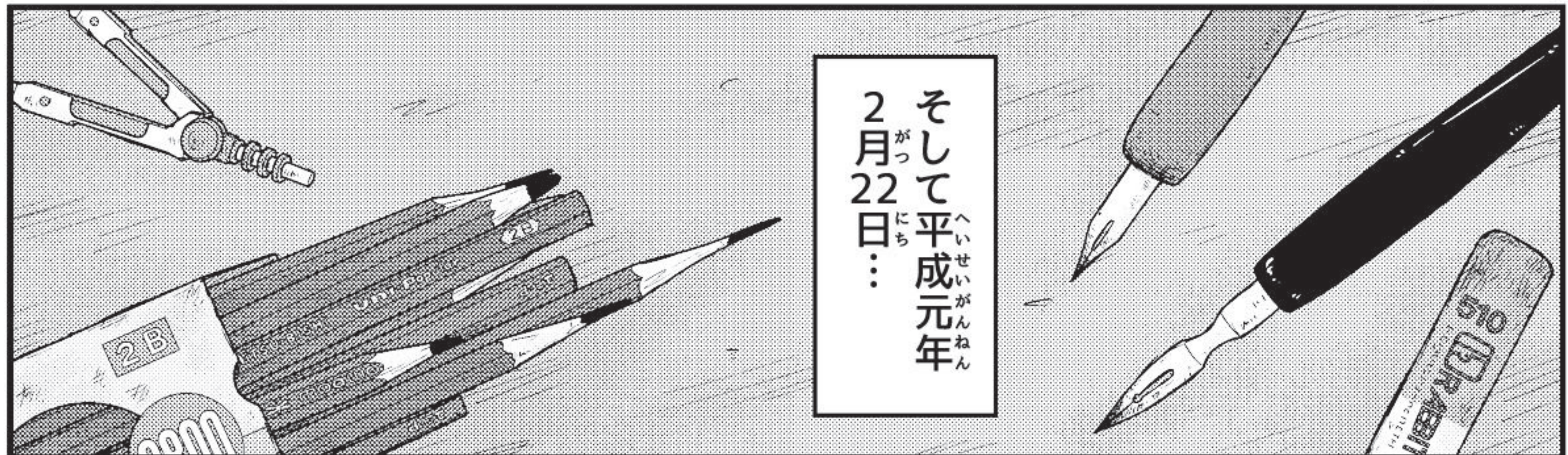
しょうわ ねん がつ こうふくじ
 昭和63年4月『向福寺』



しょうわ ねん がつ くまもとじょう
 昭和61年4月『熊本城』

昭和63年(1988年)

昭和61年(1986年)



そして平成元年
 2月22日

平成元年(1989年)

庭の紅梅が
満開の中
良輔は静かに息を
ひきとった…

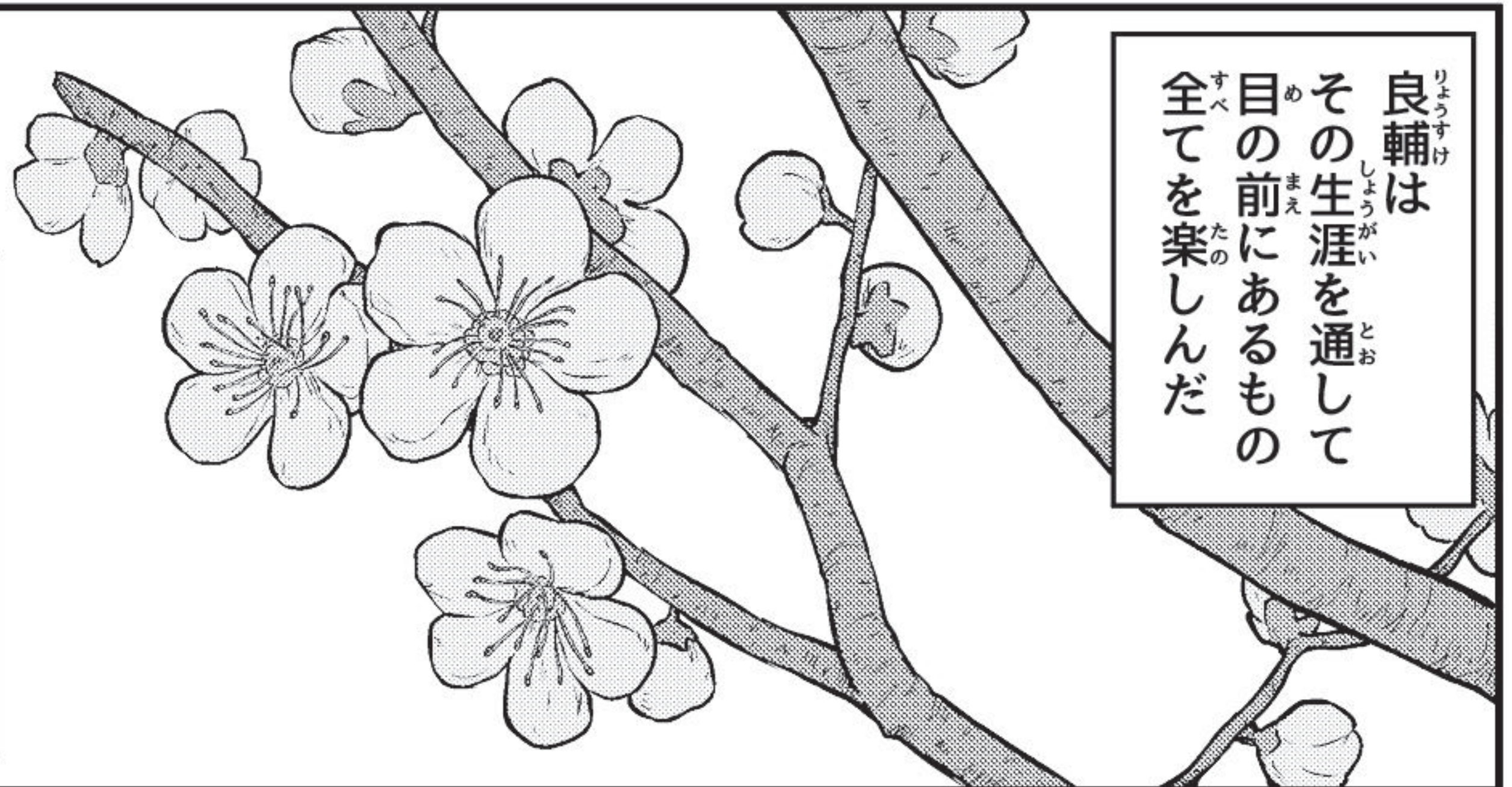
享年75才…

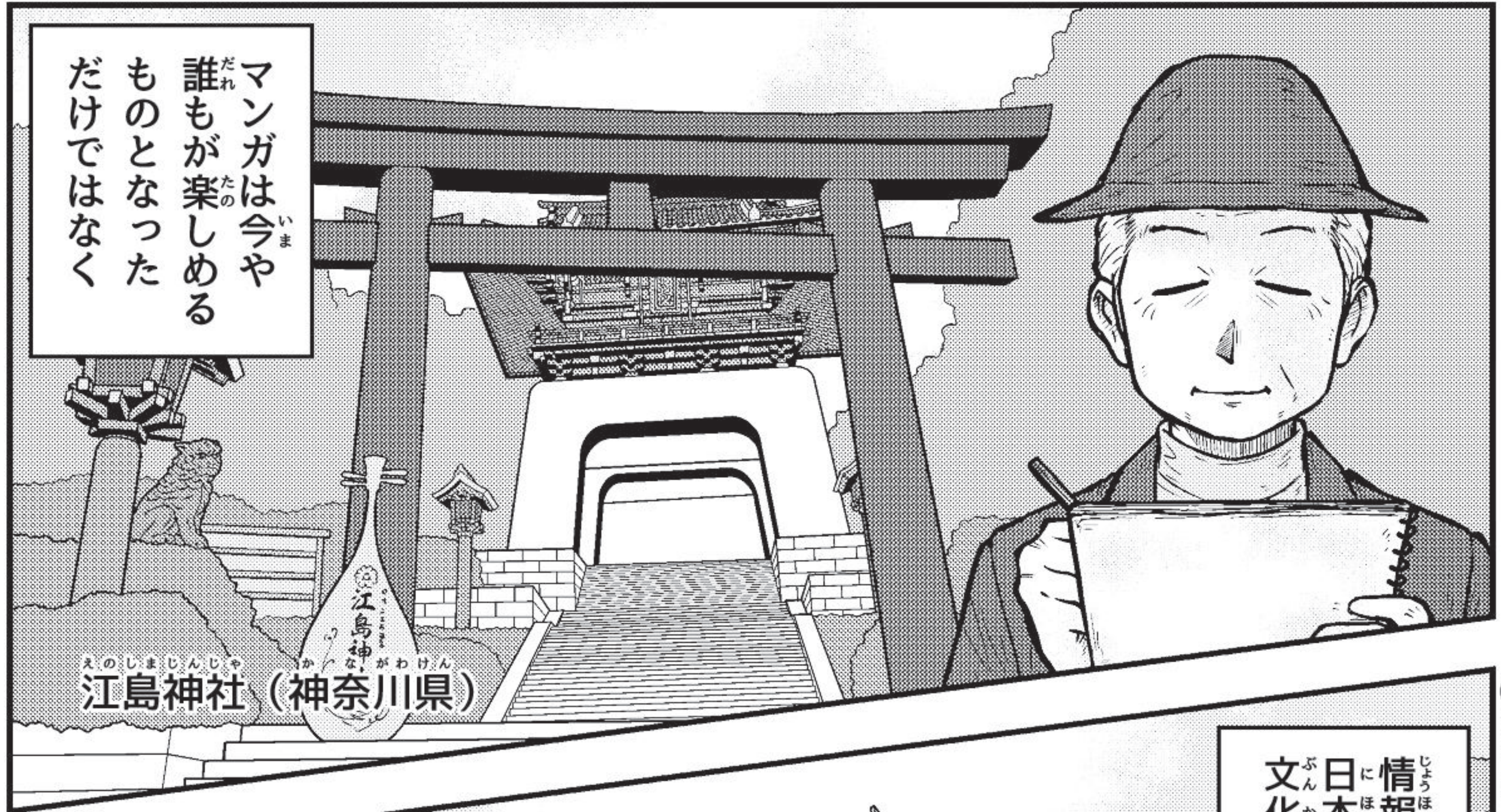


亡くなる
1週間前まで
政治マンガの原稿を
描いていたという…

良輔は
その生涯を通して
目の前にあるもの
全てを楽しんだ

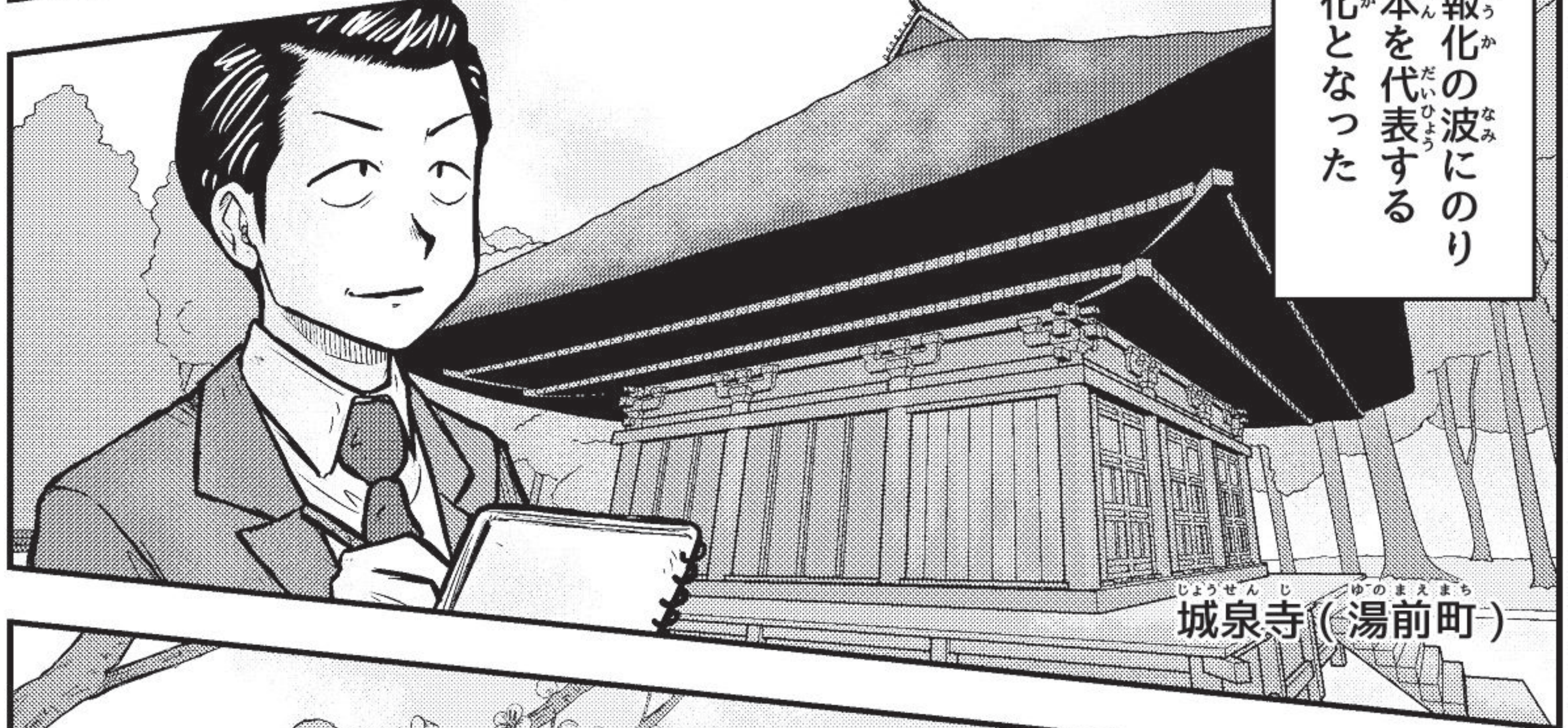
そして
その目の前には
いつも風刺と風景が
あった…





マンガは今や
誰もが楽しめる
ものとなった
だけではなく

江島神社 (神奈川県)



情報化の波にのり
日本を代表する
文化となった

城泉寺 (湯前町)

湯前町 城泉寺：県内最古の木造建築物。 国重要文化財。



那須良輔の
存在……作品……

そして「時代を
切り取るセンス」が
そこに果たした
役割は大きい

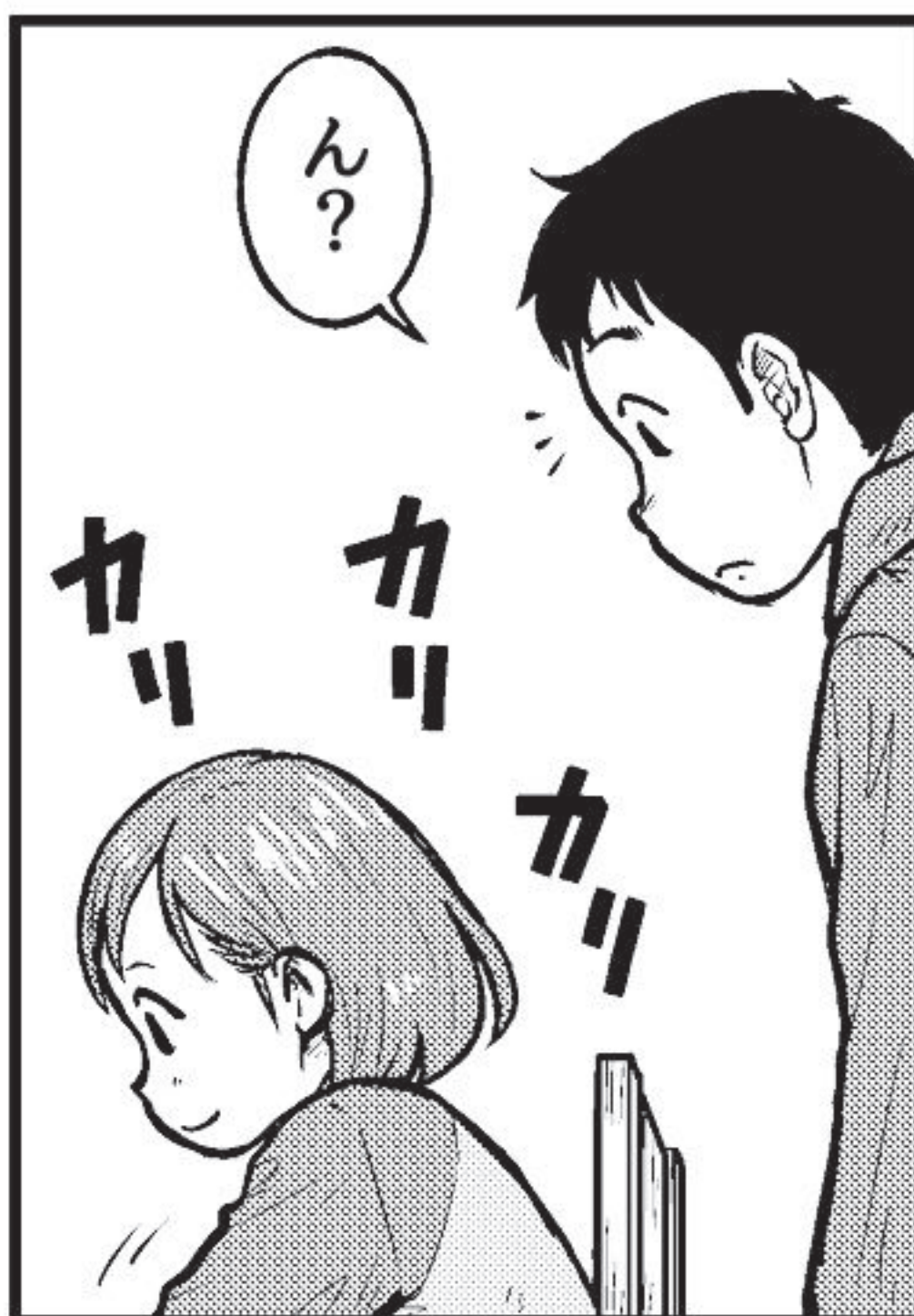
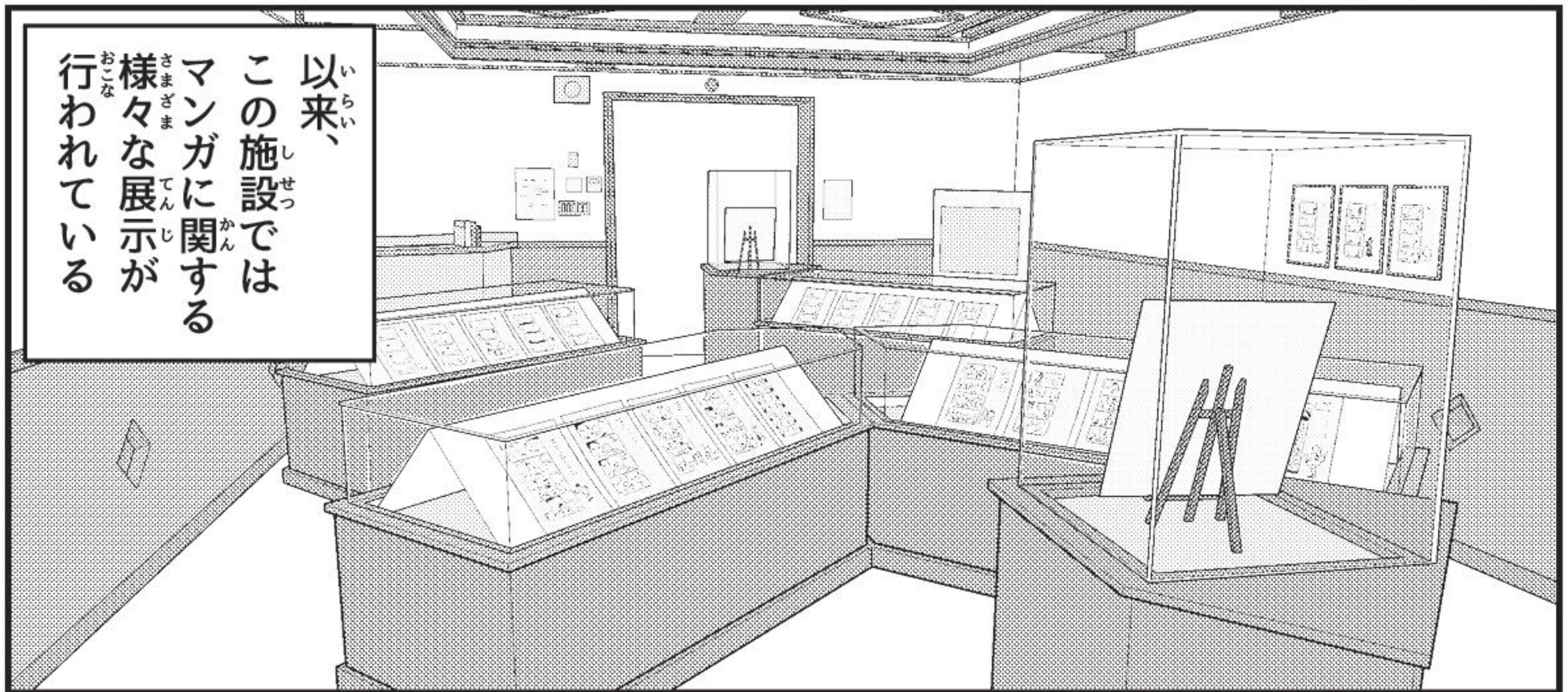
平成4年11月

那須良輔の
功績を記念し
『湯前まんが美術館』
が建てられた



平成4年(1992年)

以来、
この施設では
マンガに関する
様々な展示が
行われている



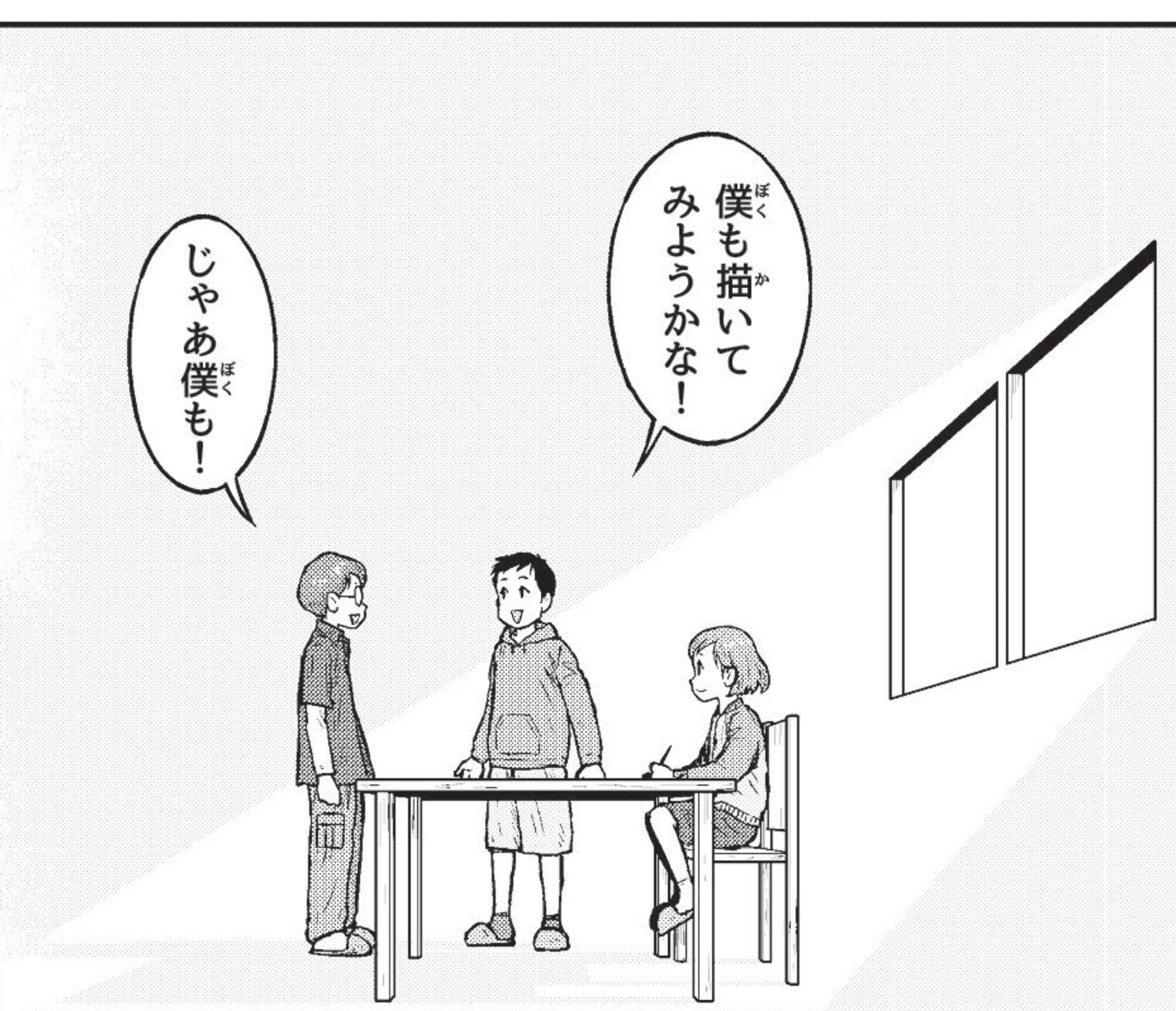
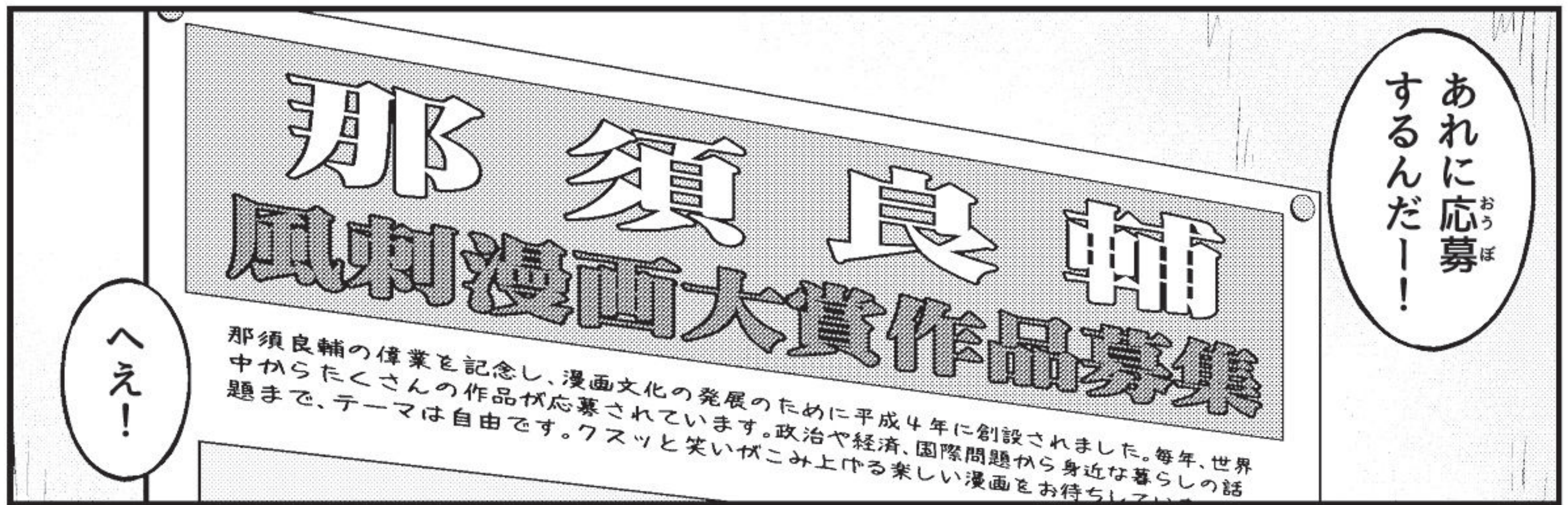
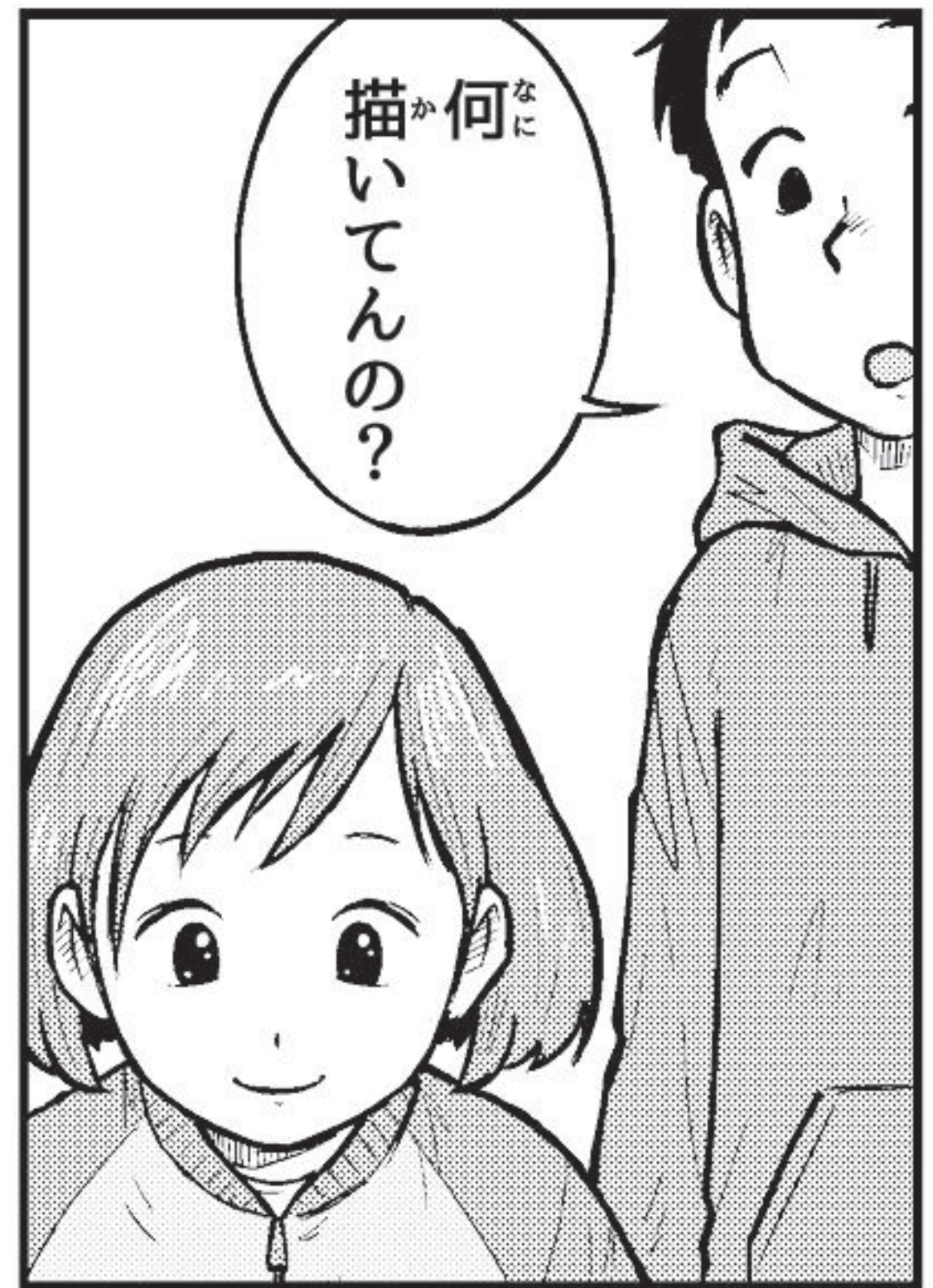
ん？

カリカリカリ



うん！

面白い展示
だったね！



湯前まんが美術館

湯前まんが美術館(那須良輔記念館)について

平成4年(1992年)2月、湯前町出身の政治風刺マンガ家・那須良輔の功績を保存・展示施設として、また、町活性化の核となる施設として開館。「まんが」をテーマとした美術館で那須良輔作品や関連資料など約1万2千点を収蔵しています。



建物は、「市房山に集う川魚の群れ」をモチーフとして設計され、独特な外観は人吉・球磨地方に伝わる郷土玩具「きじ馬」も想起されま

す。日本のすぐれたマンガ文化を後世に継承していくため、那須良輔の作品を

展示する常設展示室と、企画展示室を備えています。

館内では、熊本県内出身の作者や当館ゆかりの作者のマンガ単行本も楽しむことができます。展示スケジュールなどはその年により異なりますが、那須良輔の作品展示や「風刺漫画大賞作品展示」のほか、有名マンガ家作品の原画などを展示する特別展を開催しています。特別展では、マンガ家と読者の交流なども開催しています。



那須良輔風刺漫画大賞

那須良輔の偉業を記念し、風刺漫画を対象としたコンクールで、平成4年(1992年)からはじまり、令和3年(2021年)時点で、30回目を迎えています。毎年、国内外から多くの作品が応募され、応募総数は1万6千点を超えます。

政治や経済、国際問題から身近な暮らしの話題までテーマは自由で、笑いなगरから考えさせられるような作品が数多く集まっています。

審査員は、那須良輔が在籍した漫画集団の先生方に



お願いしており、一般を対象とした「那須良輔大賞」や「審査員特別賞」のほか、

ジュニア部門では中学生を対象とした「湯前町長賞」、小学生以下を対象とした「那須良輔大賞」などを選出しています。

毎年、5月頃から公募を開始し、9月中旬までが応募期間となっています。

第30回大賞作品



絵師の町鎌倉

誠に適切な、酒脱な絵を添えて

終戦後良輔が移り住んだ鎌倉はどんなところだったのか。

ここには鎌倉文士と言われる芥川龍之介、川端康成、大佛次郎などの文学者が多く住んでいて文化の香り漂う場所だった。評論家小林秀雄の紹介で家を買った良輔は生涯鎌倉を拠点として作品を発表し続けていく。釣り仲間でもあった白樺派の里見弴とは特に親しく、「里見弴全

集」の月報に挿絵を描いていた。

「鳩サブレー」で有名な鎌倉のお菓子屋「豊島屋」の3代目久保田雅彦との交流から、お菓子の中に入っている「鳩のつ



としまや
豊島屋本店

ぶやき」という小冊子の挿絵を描くことになり、今でも鎌倉では良輔の作品は親しまれ続けている。

鎌倉には横山隆一、泰三兄弟、清水崑、秋吉馨ら漫画集



「鳩のつぶやき」挿絵

団の仲間たちも多く住んでいて交流を深めていた。

晩年の良輔は、風刺画を離れ鎌倉や湯前の風景画を描くことが多くなっていく。当時のインタビューを見るとなぜそんな気持ちになったのかが伝わってくる。



鎌倉でのメディアのインタビュー

「最近先生が描かれているのは自然をテーマにしたものが多いですね。」

良輔 政治マンガを描いてきた反動なんでしょう。特に美しい自然を慕っているのかもしれない。今私を取り組んでいる絵と文は自分の心の故郷なんですよ。描いていてなんだか心が休まるんです。

「どんなお話ですか？」

良輔 父親が作っていたドブブロック、薬用にとっていたセンブリ、サルノコシカケ、山人に出会ったこと、山芋掘り、下駄作り、炭焼き、鰻取り、雉車作りの名人の話など、故郷で過ごした時の思い出が今では宝石のように貴重で美しく感じられます。

生涯「風」を描いてきた良輔、戒名は「自然院清諷良輔居士」となっている。

「漫画の大先輩」那須良輔

ちばてつや

作品の冒頭から大人漫画の大先輩たちがたくさん登場し『漫画集団』という仲間に入れて頂いた時の誇らしさがよみがえるような、なんとも懐かしい気持ちになりました。

ほとんどが戦後世代のボク達と違って、従軍まで経験しているこの先輩達は常に政治や社会と真剣に向き合い、市井の人々の道標となってその鋭い筆で世相を描いてこられました。

その半生を我々が「コミック作品」として紹介できるということは、ジャンルの垣根を超えた恩返しにもなるんじゃないかな、と勝手に想像しています。多くの人に手にとって読んでもらえたら嬉しいですね。



ちばてつや

漫画家・元公益社団法人日本漫画家協会理事長。
昭和14年(1939年)東京都生まれ。
代表作に『あしたのジョー』(原作：高森朝雄)『あした天気になあれ』『みそっかす』など。



「物言う国民の代表」那須良輔

里中満智子

「漫画」というジャンルにはいくつもの顔があります。今の若い人たちにはピンとこないかも知れませんが、かつて新聞紙面上の政治風刺漫画は、一般読者つまり国民にとって「政治活動の姿勢を問う重要なメッセージ」であり、風刺漫画家はまさに「物言う国民の代表」として国を動かすパワーを生み出していました。

人気漫画家は大臣に匹敵するほどの存在だったのです。その代表格の一人に那須良輔先生がいらしたのです。那須先生の人生はまさに日本の文化の歴史そのものです。

このたび那須先生の人生が漫画化され、より多くの人、特に若い世代の人たちにその実績が認識されることはとても嬉しく思います。



里中満智子

漫画家・公益社団法人日本漫画家協会理事長・「これも学習マンガだ！」選書委員長。
昭和23年(1948年)大阪府生まれ。
代表作に『あした輝く』『アリエスの乙女たち』『海のオーロラ』『天上の虹』など。



那須良輔さんとの思い出!

漫画家・イラストレーター 種村国夫



僕と漫画家の大先輩那須さんとの付き合いは、僕の師匠である小島功さんの推薦で、「漫画集団」に入会した時から始まった。今から40年くらい前の話である。

漫画集団には御三家と呼ばれた「横山隆一、近藤日出造、杉浦幸雄」を始め、有名新聞・雑誌に連載漫画を持つ花形漫画家がキラ星の如く約70名以上名を連ねており、加藤芳郎、小島功、富永一朗、手塚治虫など、蒼々たるメンバーが在籍していた。入会の条件は、大人気連載漫画を発表しているか、絵が独特で認められる事、全員の賛成が無いと入会不能だったのだ。

入団後すぐに那須良輔さんから「君は長崎生まれだってネ、オシは熊本なんだヨ!肥前と肥後同士で仲良くしようや!」と声掛け下さった。

居酒屋で、九州弁まじりに楽しく

飲食し眼を細めて大笑いする先生の顔が昨日のようである。那須さんはコワイ人物と言われていたようだが、僕たちには孫のように付き合ってた下さっていたんだナと思いつくのである。

那須さんは三度に渡って戦争に行かされ、崩御された昭和天皇と同じときに亡くなってしまわれた。その時代を象徴するかのようで、まるで四度呼ばれたかのようであった。

この世の中は近未来に何が起きるかさえ判らず、色々な事態が生じる毎に漫画のネタは絶えず、皮肉心をくすぐって来るようだ。

先生が健在だったら、今の世をどう漫画化したか想像すると、あれこれ面白い想いが心を巡る!

潔い人生!本音は心優しい先生!その名を冠する風刺漫画大賞の応募群をこれからもワクワクしながらニヤリと見定めたものだ!!

先生と初めてお会いしたのは、私が岐阜の田舎の小学生の頃...と言っても直接お会いしたわけではなく、新聞に載った先生のヒトコマ漫画。当時、手塚治虫さんなどの児童漫画に夢中だった私でしたが、ちょうど親が購読紙を毎日新聞に替えたタイミングで先生のヒトコマ漫画に遭遇。「シャープな線」というのがその時感じた印象でした。

そんな先生に初めてお目にかかったのは、私が錚々たる漫画家の集まりである「漫画集団」に入団かねて初めて参加した箱根湯本の老舗旅館「環翠楼」での忘年会の折であった。先生は旅館の浴衣に着替えられ、ゆったりとくつろいでおられました。「厳しい人」と聞いていたので、とてもやさしく接してくださいました。後から思うに、私の年齢が先生のお子さんと同じくらいというところもあったかと思えます。

湯前の先生の実家にも伺ったことがあり、球磨川での鮎釣りに同行させていただきました。当時ちょうどカメラに凝っていた私は、釣りよりも専ら先生を撮っていたのですが、それを見た先生に「君はカメラマンか?」と言われたことを思い出します。

栃木県那須の別荘にも何度か招いていただきました。古民家を移築したというそのどっしりとした佇まい、それと、お世話してくださった別荘の番人御夫妻の実直そうなお姿が思い出されます。

いちばん鮮明に思い出されるのが、先生のお葬式の日。何かの縁でしようか、昭和天皇の葬儀「大喪の礼」と重なった雪の降る寒い日でした。庭先から霊柩車まで、雪の降りかかる棺を担がせていただいた時の棺の重さの感触は今も肩に残っています。

先生との思い出

漫画家 前川しんすけ



那須さんは千支でいうと私のふた回り上の丑年であった。丑年生まれの人は普段は穏やかだが、ひとたび怒るとなかなか止まらなくなる性格であると言われていて、私自身も幾分か思い当たるところがある。

同じ丑年の那須さんは漫画家の先輩たちからは怒りっぽくてコワイ人だと聞いていた。しかし、私はそうしたイメージは全くなくむしろ優しい人だという記憶しかない。

私が那須さんに初めてお会いしたのは、昭和38年（1963年）頃新橋での事である。若手漫画家7人でお店で雑談していたところへソフト帽を被った紳士が入って来られた。店の方が「那須先生です。」と紹介してくれた。店内にいた私たちは驚き起立して最敬礼した。那須さんはカウンターに腰かけニコニコしながら、私たちに話しかけてくれ、いつの間にか、たっぷりと寿司の出前を取ってくれたのである。これには一

同びっくり。感激しながら一礼して、有難くご馳走になった。

数年後、私が漫画集団に入団。釣り好きの仲間が集まり、釣りの名人としても有名な那須さんを会長に「釣りの会」を結成した。以来、親しくさせてもらい、私も度々釣りに同行させてもらった。

「釣りの会」で那須さんのお宅にお邪魔した時の事、風呂場に入ったとたん大きな蜂が威嚇してきた。私は恐ろしくなって、その場に立ちすくんでいると、子猫がやってきて蜂を追い払ってくれた。この子猫は那須さんが良く描いていた飼い猫で、賢く可愛い子猫であった。

那須さんが描く小動物・昆虫・植物など、どれも生き生きしているのは、那須さんが常日頃やさしい眼差しで対象物と向き合っていたからだと私は思った。那須さんはコワイ人ではなかったのである。

那須さんはコワイ人ではなかった

漫画家・絵本作家 多田ヒロシ



やさしかった那須先生

漫画家 二階堂正宏



先生に初めてお会いしたのは漫画集団に入れていただいた頃で、私が三十歳、那須先生は六十四、五歳だったと思います。

同じ鎌倉に住み、先生もお酒が大好きだったので約十数年間、ほぼ毎日のように居酒屋でお会いしておりました。行きつけの小さなお店にはいつも、カウンターの一番奥から、フクちゃんの横山隆一先生、那須先生、そのとなりが私という席順でした。

この居酒屋には両先生を慕う鎌倉在住の俳優や詩人、小説家、画家等々、多種多才の人士が出入りされ、両先生のサロンのように賑やかで楽しいひと時になったものです。

漫画家の話、世の中のこと、戦争のこと、人間のこと、いろんな話をしていただき、横山先生、那須先生は私の人生の師と言っても過言ではありません。

那須先生とは似顔絵の仕事だったり、栃木県の別荘や、湯前町にも先生

のお供で五〜六回は訪れるなど旅行も随分しました。たのしい思い出がいっぱいです。

先生は釣りの名人で何十回も川や海へご一緒しましたが、「漫画集団釣りの会」メンバーが一尾も釣れないときでも、先生だけが何故か大漁なのです。山菜にも造詣が深く、先生は驚異の自然児だったのです。

若い頃は「おこりんぼ那須」という異名をもらう程だったそうですが、十数年の濃密なおつき合いのなか、一度も叱られたことはありませんでした。いつもやさしい笑顔で接していただき、その笑顔が忘れられません。

先生の葬儀で、私は受付を担当しておりましたが急に胸が苦しくなり、救急車を呼ぶ羽目に：結局なんともなかったのですが、漫画集団の仲間は「先生に呼ばれたんじゃないか」とからかわれました。呼んだけれども、思いなおして、まだ生きると戻してくれたのかも知れませんが、やさしい先生でしたから。

那須先生の思い出、湯前町の子供たちに向けたメッセージ

種村 国夫 × 二階堂 正宏 × 前川 しんすけ

— 那須先生の人となり、出会いに関しましてはコメントもいただいています、漫画家の先輩方からは厳しい人、怒りんぼうという意見もあったようですがどのような先生でしたか？

種村 馬場のぼるさん（代表作…11ぴきのねこ）という漫画家が漫画集団に入ろうか入るまにか悩んでいた時期に漫画集団の総会が銀座の料亭で行われているというので呼ばれ参加した。

その時に馬場さんは廊下の隅で那須先生がある風刺漫画家を怒っているのを目撃してしまっ（笑）た。

きっと仕事でトラブルか何かあったのでしょう。馬場さんはそれ見て「漫画集団って怖いところだ。俺も叱られる。入団をやめようか…」って後日語っていた（笑）。

前川 那須先生が私と同年の二階堂とか我々に優しくしたのは、だいたいお子さんと年齢が同じくらいだからですね（笑）。

種村 もう孫みたいでした（笑）きっと直接の後輩ぐらいだと怒られる（笑）。

二階堂 那須先生のご長男が若くして亡くなっている。那須先生ともちょうど息子さんと同じ年という話をしていた。

那須良輔と戦争

種村 戦時中に死にそうになった話をよくされた。

分隊長の命で本隊とは別方向に10人くらいの兵隊で四部隊として向かうことになった：敵から十字砲火を受けて、ほぼ全滅してしまった。

那須先生は沼に飛び込んで、蓮の葉っぱをポンと抜いて茎をストローのように使い水の下にもぐって忍者のように息をししてのいた。

上の騒動が収まった頃にやっ（笑）と這い出し、本隊に合流するこ（笑）とができた。合流するや『僕た

ちを全員殺すつもりだったのか！』と分隊長に殴りかかったと言っていました。

本当の兵隊として、三度も呼ばれていったって…。

二階堂 『横山先生は報道班員で良い思いをしている。俺はひどい目に合っている』って居酒屋などで隣同士で話していた（笑）。

種村 待遇が全然違うって（笑）。

二階堂 那須先生のエピソードで一番面白いのは、皇居のお堀で魚を釣って皇宮警察に捕まっちゃった話。あれは傑作でした。

種村 戦後まもなく、日本は

食糧難だった。皇居には「雷魚」とか「うなぎ」とかがいて、那須先生は釣りが得意だからそれを釣ってしまった。

皇居で釣った魚を持って帰ろうとして、皇宮警察に捕まったが『俺は3度も戦争に行かされて、何度も死にかけた。天皇陛下に“貸し”がある。うなぎの一本や二本持って帰っても、何とも言われる筋合いはない!』って開き直った。

困った皇宮警察は確認をとったが、本部からは「それは本当の話だから。魚はそのまま持たせて帰りなさい。」と言われたらしい。

皇宮警察は「今日は帰って帰っても結構ですけど、これきりにしてもらえませんか?みんなが真似し始めたら困るから」と話したそう(笑)。

那須良輔と釣り・

様々な交流

二階堂 「漫画集団釣りの会」っていうのを那須先生が作ってました。

種村 「釣り天狗連」:
(そうそうとみなうなぎ)

二階堂 定期的に集まって釣っていた。5、6人かな?

釣りの拠点は色々なところにあった。那珂川(栃木県北部那須郡那須町)というところには那須先生の別荘があつて、いいところでした。

種村 那須先生は庭なども大事にするから本当に綺麗でした。

前川 別荘はよくご夫婦や家族で利用されていた。

二階堂 里見 淳さんや横山隆一

先生など、鎌倉ペンクラブのそうそうたるメンバーの別荘が同じ那須高原に集まっていて、古民家を移築したような那須先生のお家が一番立派だった。

毎年別荘では文人などが集う演劇なども行われていた。鎌倉ペンクラブの方が集まって、飲み会をする会議があり、村長さんが那須先生であった。

種村 俳優の池部良さんは、お父さんが池部釣さんという作家でした。作家のお父さんとの繋がりなどもあつて、ゴルフなど一緒によくされていた。

前川 熊本県の先生の生家にも、夏に訪ねて釣りもしたことがある。川下りも…。

二階堂 球磨川で「とも釣り」もやったよね。私たちは一匹も釣れなかった。

種村 那須先生は水墨画を描

かせたら、漫画家で一番上手かった。横山さんも上手い。

那須先生から、水墨画を習う会を漫画集団でやろうとしていた時に亡くなられた。あと5年くらい生きていただいていたら、那須先生の水墨画を少しでも習うことができたと思う。非常に残念でしたね。

後は、鎌倉のお土産で有名な鳩サブレ。ここで出している小冊子は那須先生が水墨画で挿絵をかいている。那須先生は鎌倉のそういうお店とも仲が良かった。

まんが美術館・風刺漫画大賞に期待すること

前川 ヒトコマ漫画は衰退している。それはなんとかしないといけないけど、どうしてもコ

ミックには敵わない…。

我々の責任でもあるが、やっぱりヒトコマ漫画を頑張ってる。嬉しい。

種村 風刺漫画大賞は30年続けたら、もうやめられませんか。100年いかなきゃ(笑)漫画の形態もどんどん変わっていくとは思いますが、始めた以上は風刺漫画を続けて漫画文化を根付かせて欲しいです。

日本は世界でも相当な漫画文化の国でアニメ等が盛んになっているが漫画の本質であるヒトコマを忘れていく人が多い。

切なる思いや批判を声だかに言うのではなく「絵」を使って少し笑わせて世相を皮肉するよ。うな発想力というのは、日本人には昔からある。

鳥獣戯画の時代から漫画や風刺があるわけですから、ヒトコ

マや風刺漫画を何とか基本として続けて欲しいですよ。

二階堂 せっかく那須先生のよ。うな偉大な漫画家が出たところですから、漫画家になってくれるような人が湯前町から出てくると嬉しい。

種村 また出てくるでしょうね。

前川 風刺漫画大賞でも小学。生ぐらいたと、「ヒトコマ漫画や風刺」が分からないからポスターになっちゃったりしている。それでも面白ければいい。

種村 那須先生と同輩に、私と同郷の長崎出身の清水崑先生がいる。やっぱり同じ故郷出身の先輩がいるってことは、心強いですよね。漫画大賞やイベントを続けていくと湯前町からもきっとまた面白い人が出てくる。

我々もできる限り協力するので、これも何かの縁なので続けてほしいですね。

那須良輔と自然、

子供たちへの

メッセージ

二階堂 ヒトコマ漫画はコミックよりも(イメージすること

が)子供たちの頭にはいいかもしれないと思うね。

種村 スマホは便利なものですね。百科事典を持って歩いていくようなもの。

でも、全部機械に頼って自分の頭に物事をイメージしようと思わない。

自ら考えることなくそれでOKというようにしていると自分の頭が空っぽになってしま。う。スマホ・情報の頼りすぎは

一番危険だと僕は思います。

二階堂 頭が柔らかい子供たちが、スマホや情報に頼っていたら勉強にならない。便利だが、代わりに頭を使わないようになってしまう。

前川 頭を使わないという。か、みんな機械がやってくれるから使っていない。

種村 花でもなんでも写真に撮って、パッと検索するとすぐ情報が出る(笑)。

全部スマホに任せて頭でそれを覚えられない。あんまり情報に頼りすぎるのは危ないですね。

那須先生は観察力が強い人。だから海とか川とか詳しい。僕もそうありたいとは思いますが、文明の利器は使うし那須先生のようにはできない。

二階堂 那須先生以外に観察力や表現力がすぐれている漫画家

は、あまり聞いたことがない。

横山先生はどっちかというところ何か物を集める…収集癖。漫画家の特性は人それぞれですね。

那須先生は自然児。横山先生は「那須の後をついていったら絶対に食いつばぐれない」って言うていました(笑)山で道に迷ったら、那須先生の後ろをくつついて歩いてた。「あれは食える。これは食えない」と教えてくれる。

種村 那須先生は生き字引みたいな人でした。自然が好きなんだよね。

二階堂 自然の事なら何でも知っている。花でもなんでも知っていましたね。

種村 風刺漫画大賞を30年続けたことで、湯前町の子供たちはみんな絵が上手くなっていきます。漫画の描き方がわかってい

るし、漫画が子供たちの何か励みになつていと思う。

絵をただ見ているのではなくて、物事を表現するために絵を「はぐらかし」に使ったりできている。いろんなことをみんなが考えて描いているから、様々な発想力が出てくる。

二階堂 湯前町の自然を大事にして欲しい。身近な自然をよく観察することが漫画に結びつくという事を那須先生が教えてくれた。

綺麗な花や自然を観察することによって、頭で想像することによって、スマホで情報や写真を見るより植物や何かのタネ、虫などを実際に手に取った方がいい。

手塚治虫は子供の頃虫ばかり見ていた。だから治虫っていう名前になった(笑)。

本当はオサム一文字だけど、漢字の虫を付けるほど虫が大好き。

種村 漫画家は、何か好きなものを一つみんな持っています。こだわりや好きなものは一生ものです。僕のこだわりは「味」。料理も得意ですよ。

二階堂 俺は「酒」だな(笑)。

種村 何でもいいんですよ。

前川 僕はなんだろうね…一時写真には凝っていましたね。

旅先で那須先生からは「君は力メラマンか」って言われたり(笑)。

とにかく、湯前町の子供たちは、東京の子供たちよりも、すごく恵まれている。

(一同 そう。)

前川 自然はあるし…。

種村 川や森に温泉もあるし最高だよ。

前川 なかなか難しいけど、

その良さを分かって欲しい。「そういう、良いところなんだよ！」って我々は言いたい。



マンガふるさとの偉人 -那須良輔物語- 風を描く人

2022年2月22日 初版発行

発行 熊本県 湯前町

著者 原作 橋本 博 (NPO法人 熊本マンガミュージアムプロジェクト代表)
作画 タネオマコト

監修 ◆那須良輔偉人漫画制作と活用検討委員会

委員長 (湯前町長)	長谷 和人
副委員長 (湯前町教育長)	中村 富人
熊本大学 准教授	鈴木 寛之
有限会社ぷらんどろデザイン工房 代表	有地 永遠子
湯前町立湯前中学校 校長	新川 晃英
湯前町立湯前小学校 校長	吉村 和仁

◆京都精華大学

准教授 伊藤 遊

◆湯前町教育委員会 (湯前まんが美術館-那須良輔記念館-)

◆湯前町 B&G 海洋センター

制作 ◆株式会社 COLT

代表	大野 光司	作画アシスタント	ハシダ
編集	只隈 康介		岡 かえで
デザイン	安達		尾倉 諭子

協力

◆那須家親族

田淵 亮子
城川 久代
柳谷 三谷子
松木 八重

◆漫画集団

多田 ヒロシ
種村 国夫
二階堂 正宏
前川 しんすけ

◆漫画家

ちばてつや
里中 満智子

◆スペシャルサンクス
株式会社豊島屋

協賛 公益財団法人ブルーシー・アンド・グリーンランド財団

出典 「漫画家生活 50 年」「吉田から岸へ」「鎌倉を描く」那須良輔
「湯前まんが美術館館蔵品図録 (I)」湯前まんが美術館

おことわり

本書の電子データ化等の無断複製は、著作権法上での例外を除き、禁じられています。
代行業者等の第三者による本書の電子的複製も認められておりません。
このマンガは史実に基づいて制作しておりますが、一部創作が含まれます。

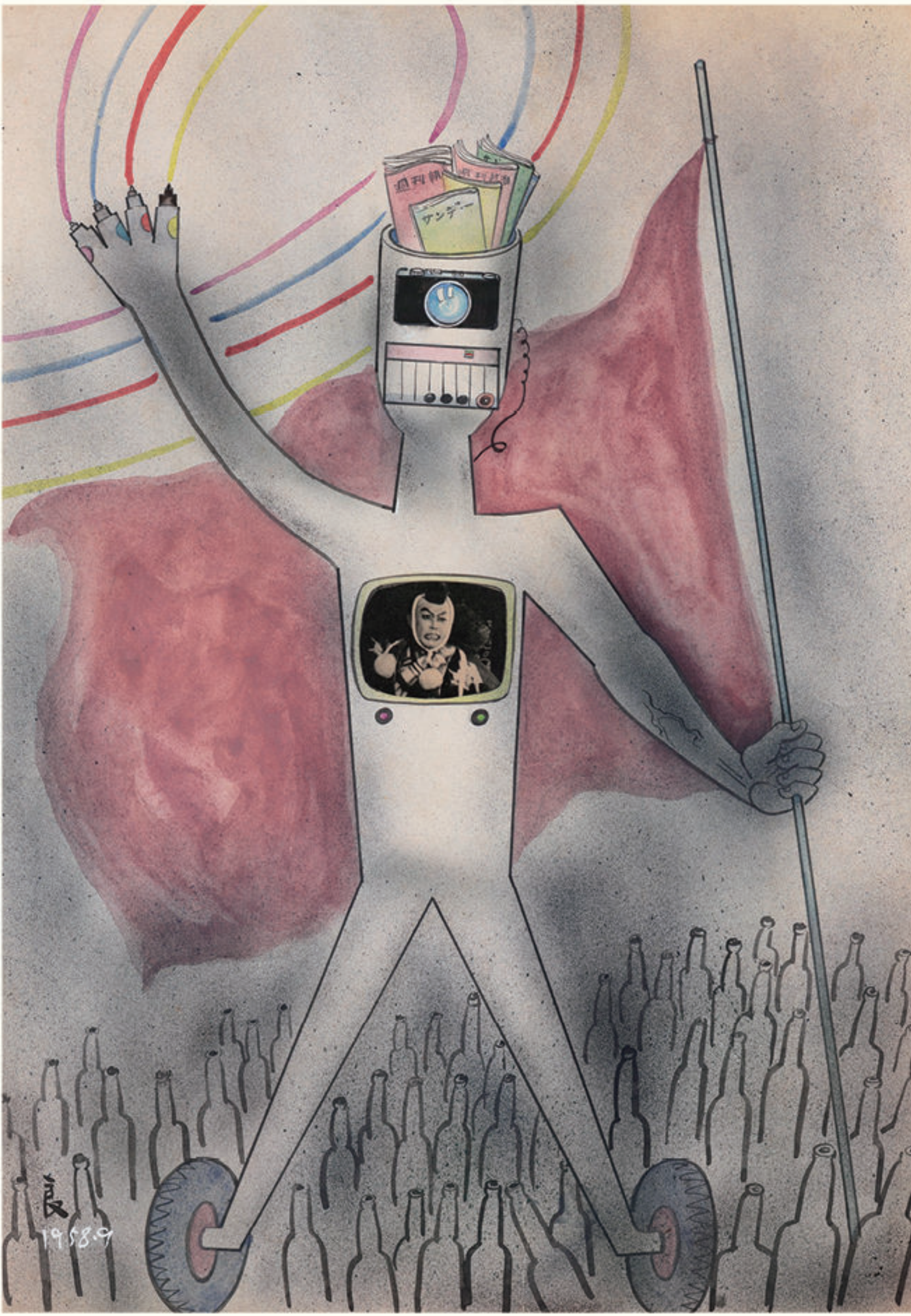
— 那須良輔の世界 —



「ママの国」昭和32年(1957年)8月



「防空壕」昭和33年(1958年)9月



「へそのない人間」昭和33年(1958年)9月



「麻雀」昭和47年(1972年)頃



「沖縄は悲しからずや2」昭和34年(1959年)8月



「沖縄は悲しからずや1」昭和34年(1959年)8月



熊本県 湯前町

B&G

Supported by



THE NIPPON
FOUNDATION